

# 石川雅望年譜稿（八）

—— 文政元年より同九年まで ——

柏谷宏紀

（教育学部国文学研究室）

本稿は『高知大学教育学部研究報告』（第二部・第三十二号、昭和五十五年五月）につづくものである。今回は雅望六十六歳より七十四歳までを収めた。例により不備、誤謬の点が多々あるので、識者の御示教、御批評をお願いする次第である。

文政元年戊寅（一八一八） 六十六歳

△四月二十二日改元▽

○春、『賀筵友鶴集』（千歳軒友鶴編）に賀歌を寄せる。

▲供はあれとつれたにひとりなかな旅の大名いかにさひしかるらむ

六樹園

□右書は信濃の狂歌師田中左内久福の八十歳を祝して、京都で刊行された狂歌集である。久福は千歳亭・田鶴友年・鶴友などと号した。代々東上田（現長野県小県郡東部町）において庄屋を務めてきた家に生まれた。狂歌に親しんだのは、文化年間に入ってからのことであった。

『賀筵友鶴集』には、南畝のほか浅草市人・窪俊満（挿画も寄せる）

・四方滝水・真顔といった一流の人たちが賀歌を寄せている。そのほか京・江戸・越後・伊勢・陸奥・播磨・上総・甲斐・上野在住の狂歌に親しむ人たちが賀歌を寄せている（浅岡修一氏「信州における狂歌——上田地方を中心にして——」長野県学校科学教育奨励基金奨励研究報告書・昭和五十

二年による）。

※四月五日、便々館湖鯉鮒没す。享年七十歳。

□初号福林堂巨立。通称大久保平兵衛、名を正式という。江戸牛込山伏町に住む。琵琶連を主宰した。天明時代から活躍してきた最古参の狂歌師の一人で、四方側に近いが雅望にも極めて接近しており親しかった。

○極月、『文政己卯春興集』（中一冊・北溪画）を撰す。

▲題簽

文政  
己卯春興集 六樹園撰 全

序文

文政三年庚辰臘月

狂蝶子文磨

□序文によると本書は、文政元年に編集が終わり、翌二年春刊行するはずであったが、事情（不明だが）により、文政三年正月に刊行が延引されたという。

○この年、『戊寅春興集』を編纂して、六樹園社中より刊行する。

▲『国書総目録』による。未見。

○この頃か、毎月十三日に月並狂歌会を開く。

▲遊里

『三景狂歌よみ人名寄細見記』（式亭三馬序・催主錦糸亭綾機・校合所花咲庵米守・文政元年六月刊）による。

□本書は吉原細見をまねた体裁になっており、各社中の月次会日、所属する作者の位付けが掲載されている。同書によると、五側は「毎月十三日飯盛たち」とあり、同社中が巻頭におかれている。

ちなみに五側に記されている人たちのあげると、

砂 綾重 千尋 鶴城 綱人 芳潤館 万守 光丸 歌道 福住 高丸 真鳥 折主 仙丸 澄 花乃八月野 八雪のである。また同書で興味深いことは、「玉詠集所」として「新西町 しがらき・聖堂前 中村や・赤さか よしだや・薬研堀 若みどり・小柳町 むさしや・富松町 八木や・よつや 住田勘次」らの名が掲げられていることである。これらは川柳評万句合の場合と同様、狂歌の取次所であって、住田勘次(玉光舎占正・彫師)以外は「料理茶屋」であろう。

その他掲載されている社中を記すと芍薬亭長根・臥竜園梅磨・神田居真鳥・鈍々亭和樽・錦糸亭綾機・霞仙亭桃人・至清堂捨魚・宝市亭升成らである。

○この頃か、黒沢翁満の『藐姑射秘言』をはめる。

▲おのれ前つ年、戯れに藐姑射秘言をかきすさびたりしに、いささか人情にあへる所など有にや思ひの外にもはやされて、江戸の学友どもは更なり、遠きあたり迄も写し伝へられたるが中に、石川の五老にほめられたるの心に嬉しと思ひし事也。松屋の与清は珍書をおくりて後編を求め、前田夏蔭は文会を企て相談におこせなど、やもせば自負驕慢の心などもきさしめばかりしかども、さる事は思ひもかけずして、五老の一言のみ耳にとまりしは、彼を見知る人と思へばなりけり

(黒沢翁満「随意稿」)。

□黒沢翁満(寛政七年—安政六年)は、桑名藩に仕えた国学者で(賀茂真淵の学風を慕い、独学で国文を修めた)、藩侯が奥州白河、武州忍に領替

えになったときも従った。のち大坂の留守居役となり浪華の文学を奨揚した。彼は若くして文名が高く、桑名在住時代から江戸の学者文人たちと文通があった。忍に移ってからは江戸の文人たちと会う機会が多かったと思われる。晩年江戸で板行された『当世学者見立番付』

(弘化初年—一八四四頃)には、国学者の黒沢翁満と儒学者の佐藤一斎とが東西の大関に据えられている。翁満の学名が当時世上に鳴りひびいていたことが、この一事でも察せられる。翁満は通称八左衛門、名を重礼、号を葎居といった。著書に『万葉集大全』『神楽催馬楽抄』『古今集大全』『神道学訓』『言霊のしるべ』など四十種ある。

『藐姑射秘言』は『阿奈遠加之』(沢田名垂)、『逸者聞集』(山岡明阿)とともに、江戸三大奇書と称された。本書は古歌や古文からの本歌取、文句取、あるいはそれらのパロディによって成り立っている戯著である。本書は初編後編の二巻であるが、これらは同時に執筆されたのではなく、後編の序文によれば、初編を親しい学者文人間に回覧伝写されて評判高く、続編執筆の要望が強いため、前後編二冊が成立したという。

前記「随意稿」で、翁満は初編を述作して、数人の先輩からほめられても、国文の知識を縦横に駆使した点を正しく認識してくれたのは石川五老(雅望)ひとりだったと記しているが、古典の語句に関心を持つ雅望には、本書の文句取りの一つ一つがよく理解でき、そこに流れる諧謔精神も理解できたので賞賛したのである。翁満は弱冠二十余歳の時であった。なお本書は岡田甫氏によって語釈、通釈が施され出版されている(秘籍江戸文学選1・日輪閣・昭和五十一年一月刊)。また翁満については渡辺刀水氏のもの詳しい(『書物展望』・昭和八年二月)。

○『狂歌紫のゆかり』(半一冊)を千首楼堅丸・浅草庵守舎らと撰じて刊行する。

▲『狂歌書目集成』による。

□『国書総目録』は右書引用とのみで、その所在を明らかにしていない。『狂歌書目集成』は「内題に『紋表紙御前夷曲集』とあり。刊年及版元とも明瞭を欠くと雖も、凡そ推定によりて茲に収む。この書の面白味は作家各自が自分の戯号や狂名に相応はしき狂紋一仮作の紋所一を勝手に作りて、如何にも祖先伝来の家紋でもあるかの如くに見せかけた点にあると思ふ」と記しているが、右記事から推して私家版の配り本ではなかったらうか。

○この年すでに『源註餘滴』の稿が成るか。

▲『源氏物語』下（国語国文研究史大成・三省堂刊）による。

□『源註餘滴』は二十巻で、いずれの流布本にも成立年についての記述はない。本書は雅望の源氏物語研究の成果をしめしたもので、現在でも高い評価を与えられている。本書は『湖月抄』を読むために、その誤りを訂正増補したもので、その際、主に契沖・真淵・宣長の説を採用し、まれに荻生徂徠・谷川士清・山岡明阿の説も用いている（中村幸彦先生より雅望書入れの『湖月抄』が、天理図書館に蔵せられており、『源註餘滴』との比較検討されては、との御書翰を戴いたが、怠けておりいまだ調査をしていない）。特色は松本信弘氏の『源氏物語研究史』によれば、国学者の新しい研究を援用し旧注を補っていること、引用が正確で広汎なこと、語釈に見るべきものが多いことにある。

なお本書を文政元年成立としたのは、前記書と山岸徳平氏が「文政元年に成るのであろう」と記されていることによる（『源氏物語研究』・有精堂刊）。

○五世市川団十郎の十三回忌にあたり、追悼歌および追善文を記す。

▲五代目白猿の十三回忌に

十三月は月見にあらぬ年忌なりされどもやはり空は見らるる

（立川馬馬編『以代美満寿』）

▲市川白猿十三回忌を弔ふ詞

三 石川雅望年譜稿の（柏谷）

白猿の翁なくなりてよりはやとをあまり／みとせとそ成ぬる。立川なる馬のぬし、／人よりさきにかそへとりて翁のすきたる／すちなれハとて、人々のことのはをあつめて、／かうさまのふみはつくり出つ。いてやなにはの／ことかのりならぬあそひたはふれのことくさ／も、佛の縁としき／なれば、かつたのもし／きこちそするや。翁世にありしときは／本性まめやかにさけふかく、たからをむさ／ほらす、人にへつらはす、人にへつらはす、／むらいの（見せ附ち）人にことをましへす、はかなきことに／もそらことをいひ出す。よろつつ／やかなるうへ／もんさえのかたもおろかならされは、いひいづる／ことのはもやんことなく興ありて、人感すへき／ことをそつ／りなしたる、されはそのかみの／人はさらなり。同わさする人々にも、かふきの（以下二枚目につづく）／おやとつやまはれて、おとろ／しうもてはや／されて、かたさらぬものはかりしは、けに／いみしきすくせなりかし。いてや現在の因／をみて、こんよの果をしろとか、とかせ給へれ／は、今のほと／品のなるかみなるありか／たきところをしも、すみかとやらうししめ／ぬらん。もとより御佛の御まなしりにハ／かゝる人をむかへとり給ひてこそ、こくらくの／おもておこしも御覽すらめ。あはれ翁なく／なりにたれと、市川のなかれ、猶かるゝことなく、／いやしきなみになたかきはあらまし。ことのはい／かなひてひて、ひとそうの人ハ／さらなり。かたひきおも／ふこゝろにも、うれしとみさる人やあらむ。さはいへとかゝる／みのりのゑにのそみてハ、けふハそのよとうちうめ／かれて、まづ昔のみ心しのはる／ハ、ほけたる人のくせ／ならんかし

六 樹園

□白猿十三回忌の文は、野崎左文翁編の『六樹園文集』（慶應義塾大学図書館）に収められている。私は中村幸彦先生の御好意によって、御所蔵の『六樹園自筆忌歴録』中に貼布されている、雅望自筆の文を紹介した（句読点は柏谷の私意による。／は行移りを表わす。原文には「市川白

猿十三回忌を弔ふ詞」の題詞はない)。体裁は二枚に分割されており、それぞれ縦十六・三センチ、横二十二・二センチの大きさである。市川白猿と狂歌界との関係は、従来諸家によって説かれていたので省く。

○本年刊行の『江戸諸家人名録』二編に記載される。

▲雑家 六樹園 名雅望字 盤岸島 石川五郎兵衛  
一五老 江戸人

□右書は書名が表わしているように、文化人名鑑で、扇面亭(扇屋伝四郎)編により、江戸西村宗七より刊行された。

○この年、『近江県物語』が再版される。

▲文化五年の項参照。

文政二年己卯(一八一九) 六十七歳

○一月十三日、山田早苗より「狂歌よみそめ代」として一分。

▲『永久田家務本伝』巻六。

○一月十五日、名古屋の石井垂穂に会う。

▲文政二年正月十五日、両国柏屋吉五郎方にて、六樹園会初。帰路油町焦園、三み線堀へ年礼(森銃三氏「蕉園の父唐衣橋洲」・同著作集四卷)

□右の記事によると、垂穂は雅望にはじめて会ったことになっている。私は雅望が文化元年の関西旅行の途上、名古屋で垂穂に会ったとしたが(拙稿「石川雅望の『草まくら』の旅」及び「文化元年の石川雅望一年譜稿(四)」)、右の垂穂の日記が事実ならば、訂正せねばならないがまだ検討をしていないので、そのままにしておく。

○四月、再版の『百鬼夜狂』に序文を記す。

□「長文なので略すが、『文政二年四月』と記されている。なお本書は天明五年に、大田南畝の序文で刊行されている。なお再版は「文政三年」に刊行された。

○五月、門人山田早苗の父鉄真の三十三回忌に当たり、碑文および歌を記す。

#### ▲石碑面の事

文政二卯年五月七日は玉法院悟岳鉄真上座三十三回忌にあたり給へば、四月七日に取越して青梅村天寧寺に、徳雅参詣因之溝端町親族並に知音の者を相招き候て、餐膳いだし法事執行、扱五月七日は正当の忌日なれば、四ツ谷西念寺にて法事執行して、右寺の本堂の前庭に法華経歌の石碑をたてつ、さるは鉄真在世中の毎月妙典読誦し給ひつ、ひと日二十八品の心を題となして和歌をよみてかいつけ置給ひしを、其中ある一首をぬき取て石のおもてにあり付置、のこりのみづききここに埋みたる印の碑也、供養すべしと子孫に伝へ置ものなり、其由石川雅望翁にきこえければ、さる歌のかたはらに詞をそへて、みづから書付賜ひたるをさながらありつけおきつ、さるを前面背面共にすり物して掛物となし置朝夕供養しつ、又青梅の里兄小林文右衛門の許にも其通り二幅賜り置つ、碑面文章歌左にしるしつ

鉄真法師としをへて妙典読誦の切つもりけるが、ひと日二十八品の心を題となして歌よみてかいつけ置ぬ。此人なくなつてことしみそとせあまりみとせに成ぬとて、子なりける早苗ぬしその中なる一首をぬきいでて此石にありつけて、のこりのみづききをばさながらうづみてかくさまにしるしをばたてつ。あはれけうの心ゆかしやと感ずるあまりそのよしをこゝにしるしつ

文政二年己卯五月

六樹園石川雅望

かきりなく／なかきよてらす／ことほりの／ちかひは空に／ありあけの月  
(『永久田家務本伝』巻六)

□右の歌は『六樹園狂歌集』(野崎左文編)に「鉄真法師の碑を橋樹園早苗がいとなみたつる時其裏にあるべき文字書き与へたる末に」という詞書とともに再録されている。

なお五月七日には、大田南畝・大窪詩仏・菊池五山・亀田鵬斎らの

江戸の文人たちからも、供養の詩文が早苗の許に寄せられており、山田早苗の父鉄真の交遊の一端をうかがわせている。ちなみに早苗の文言中、里兄小林文右衛門とある人は、狂歌師柳樹館芳文のことである。

○五月二十九日、烏亭焉馬より『狂歌笛竹集』（文政六年刊）に関しての書簡をうけとる。

▲今朝は御出ゆる／御物語申大慶（不過之候／その節御頼之面策は／先祖にとるとも一念力は／おとらしと是にてたちまち／画きまいらせ候以来如何／様なるむつかしき絵にても／無遠慮御申越可被成候／絵の事は素人／わざに雪姫も／はだして逃ん／五月雨の漁夫／船岡山へとをへ三重／いそき行

五月廿九日

六樹園先醒

談州楼

（中村幸彦先生御所蔵）

□右書簡を雅望撰の『狂歌笛竹集』に関して、焉馬より雅望あてたものとしたのは、延広真治氏の御教示による。同書は狂歌絵本の一種で、焉馬をはじめ柳亭種彦、式亭三馬らが画を描いている（文政六年の項参照）。

○六月、『<sup>新</sup>撰狂歌五十人一首』（一冊・北溪画）を撰して刊行する。

▲刊記に、

文政二季己卯六月発行

撰者 六樹園飯盛

集者 六樹園南北

画工 拱斎北溪

とある。

□本書は一部肖像、住所入りの五側の狂歌人名鑑である。地域別収載人数は次表のようであるが、関東地方に五側の勢力が及んでいる。こ

れは他派も頻繁に出版しており、文化期にいかん狂歌が、全国に流行していたかを如実に語っている証といえよう。

奧羽羽	一一	一四	二五	尾張	八	一四	二二
出羽	四	一	一	伊勢	五	九	一四
信濃	七	四	二	紀伊	二	七	九
上野	二	一	一	攝津	二	二	四
下野	一	一	一	和泉	一	一	二
常陸	三	二	一	播磨	一	一	二
武蔵	二	一	一	淡路	一	一	二
江戸	二	一	一	阿波	一	一	二
甲斐	一	一	一	長門	一	一	二
美濃	七	九	一六	計	八五	一八二	二六七

○六月、狂歌会の行司（判者）をつとめる。

▲狂歌一會大角觥

行司 六樹園大人

東夷庵大人

楽評 談笑亭主人

会主 彷徨亭

文政二己卯六月

□右は丸山一彦氏「狂歌合にみる地方と中央の交流―文政期の資料を通して―」（『文学』昭和五十三年八月号）による。同氏によると、これは狂歌の刷り物である。小規模な狂歌会が、会派を問わず絶えず行われていたのである。

○六月五日、柳橋の料亭万八楼で開かれた狂歌会の判者になる。及び狂

歌を詠む。

▲維時文政二己卯年六月初五於両国柳橋千万八楼上開巻（『東都十二景狂歌集』刊記）

▲吉原初春

うちはやす唐言の鳥をきゝなからひよくとちきるさとの七くさ

□この狂歌会の成果は、文政三年秋『東都十二景狂歌集』と題して刊行された。内容は江戸の名所十二カ所を狂歌に詠んだもので、判者は雅望の他に芍薬亭・臥竜園・文々舎・琴通舎・西山楼・北斗庵・文車庵・神田居・鈍々亭らがなっている。

○八月ごろ、本居内遠に会う。

▲閏四月九日、江戸におもむき給ふ。同廿日着。八月廿二日、江戸をたち給ひ、鎌倉鶴が岡江の島にまうで給ひ、猿江の秋葉山などにも巡り給ひ、九月十六日帰国し給ふ。江戸にて清水浜臣、小山田与清、岸本由豆流、静慮、馬琴、三馬、一九、京山、真顔、石川雅望などに逢ひ給ひ、かへるさ駿府にて柴崎直吉、遠州にて石川依平、大橋年武に逢給ふ（『内遠翁略年譜稿』文政二年の条・『国学者伝記集成』所収）。

□内遠は名古屋の書肆万巻堂菱屋久八郎の子として寛政四年（一七九二）に生まれ、年少時に発句、やや長じてからは狂歌を好み（父親も二代目佩詩堂右馬耳風の狂号で活躍、祖父は初代耳風、篠野玉洞という）、また笑話類（小野秋津の号で『落嘶恵方棚』の笑話本を編纂）にも親しんだ。本名浜田弥四郎という。また国学者市岡猛彦、鈴木腹に学び文政三年本居大平入門、のち大平の婿養子になり本居の学統をついだ。榛園、木綿垣と号し、大平の没後家督を相続して和歌山藩に仕え国学を講じた。そのかたわら古文書の収集や『紀伊統風土記』の編纂を行った。そのほか国学や神道関係の著作が多い。

雅望と会ったときは内遠二十八歳で、翌年大平入門したのである。江戸で国学者はもちろんのことであるが、京山、馬琴、一九、三

馬らの戯作者達を訪問したのは、書肆の息子として戯作界に通じていることと、自身が戯作に親しんだことによる。

○八月、狂歌堂真顔・談洲楼焉馬撰の『狂歌棟上集』に狂歌を入集。

▲しはす五日の夜狂歌のすき人たち焉馬ぬしの家につとひけるに雪日冥青楼といふことを人々よみける時  
酔してたいこかつくる雪仏をかみんすによ例のむり酒

六 樹 園

○九月、『雅言集覧』第一冊刊行される。

□文化十四年に角丸屋基助と須原屋伊八との係争から、書肆よりの刊行が中止となったので、私家版として公刊したのである。私家版として売り出されたので、売れ行きは自然と円滑さを欠いたと思われるが、年内に二百部ほど売れたという。

○九月、『雅言集覧』を本居大平に贈る。

□文政三年の項参照。

○『狂歌陸奥百歌選』に序文を叙す。

▲五十四郡の人々を集めて三十一文字のざれことをよます其数百に満ちぬるは千柳亭のおもき功とぞ知られしそかのわたりはこがね花咲く山ありとこそ聞伝へしかいかでかゝる詞の花はしも咲いでたりけむいでやこの詞の花よさかりこゝなる梅が香を桜の花に匂はせたりともいふべかめるを家の名にしもよびつけたる柳に咲かせたりしはげにもこよなきものにこそあはれいづこハあれど塩釜のからまるぬしの選みなれば何かはいはでしのぶべきとたゞ宮城野の露ばかりかゝる朽木のはしつくして籬のしまの島屋のたよりにおくり遣はすことになむ  
□本書は奥羽地方の狂歌人の画像入名鑑ともいうべき性格を持つもので、選者は千柳亭唐曆（通称錦織即休、仙台の医官で三陀羅法師の門人。のちに五側の判者となる。元治元年五月五十七歳で没した）である。仙台池田屋源蔵刊である。

文政三年庚辰（一八二〇） 六十八歳

○元日、山田早苗より「狂歌よみそめ代」として一分。

▲『永久田家務本伝』巻六。

○正月、延引されていた『文政己卯春興集』が、狂蝶子文麿蔵版で刊行される。また狂歌一首を収載する。

▲花の下やへこのへに人の来て見るは梅さく宿のめいほく

六樹園

□文政元年の項参照。

○一月二日、司馬園盛砂編『狂歌著聞集』に序文を収す。

▲昔在匡衡説詩解人頤。蓋是方朔郭生慢戲滑稽之流乎。善戲謔兮不為虛兮其是之謂乎。夫人之在世也。開口而笑者亦一月不過四五日己。信哉勞我以生。然則終日群居言不及義。不如劇談笑語可以遣興佚生也。近司馬園者採摭諸子所筆記笑話。藏之篋笥積成數卷。名曰狂歌著聞集。令即題卷端且為校正。此書談謔笑詠雖不助於警世。亦是為風流話柄矣。豈不云狂夫之言聖人挾焉。於是乎書。

文政三年正月二日書十六樹園 石川雅望

□本書は五側の狂歌師たちの挿話、あるいは滑稽な逸話（創作もかなり交える）を集めたものである。題名は鎌倉中期成立の説話集『古今著聞集』に倣っている。のべ八十一人の五側の狂歌師たちの挿話が収録され、それぞれの話のあとに狂歌が付せられている。

※一月二十四日、北尾重政没す。享年八十一歳。

□本姓北畠氏。江戸小伝馬町の書肆須原屋市兵衛の長男として生まれる。幼少より画を好んで独学し、ついに一家を成した。画名は北尾重政、繁昌、恭雅、花藍、紅翠斎など数多い。画の定まった師はないが、俳諧を谷素外に学ぶ。その他書道に通じていた。宝暦年間に紅絵をつくり錦絵時代に入ってから、勝川春章、歌川豊春に伍して美人

画に秀作をのこした。しかし、綿絵の作はあまり多くなく、黄表紙の挿絵や絵本に名品が多い。

雅望とは小伝馬町に住むというところから親しく、文化六年刊の『文化新撰狂歌百人一首』の肖像画を担当している。狂歌入絵本を数種刊行している。門人に北尾政演（山東京伝）、北尾政美、窪俊満などがあり、葛飾北斎、喜多川歌麿なども一時教えをうけたことがある。

○二月十九日、昨年刊行した『雅言集覧』を本居大平に贈ったが、大平から何の沙汰もないので、遠藤春足に不満をのべる。

▲いかなる訳にか所存の程しれ不申、不審致候事に候（文政三・二・十九付、雅望より春足宛書簡）。

□受取状が来たのは和歌山の医師西川玄湖からだけで、高価な私家版だけに春足あての雅望の不満はうなずけるものがある。

前引の太平の言（清島の書状文面）からも推して分かるように、大平の格式ばった人柄によるものである。あの滝沢馬琴ですら「十三四の童子兩人、袴ものして主人の下座に侍りたり。徒弟つどへ、門戸を張る人の用心は、ものものしきものにこそと心に思ひたりき」（『馬琴翁書簡集』日本芸林叢書九収）と驚いている。

○秋、『東都十二景狂歌集』（一冊・北溪画）に序文を記す。

▲金のなる樹のしたふくるあら玉川のしろ水をながして土一升をこがねにおふる大江戸の町の繁昌なるにハ班孟堅き□□も□□がんくてぬかつくべくまして四季のゆきかひのめでたきさまなどをひの山の老入道ならびか岡の青道心らに見せましかば一心敬礼して数珠をすりぬべしされバ草ハみながらとよみにしいるハ助六がはちまきにのこりわけわびにたる芦荻はわずかに菊塙がはちうゑとなりぬけに／＼桑田碧海一夜検行にはか分限のいつそくとび近江うまれのふじ山も駿河町のめしたきが月にハすりばちとも見やるべければこゝに杭州のすりこぎをもち出るともなかくみそをやつくべからんこのにぎは／＼しきも／＼がひ

とつを江戸まへのざれ哥にとりなし、はこれ江戸ッ子のえどじまんに  
て太平楽のかたちをさながら臥遊のまうけとなすこゝろにや

六 樹 園

▲刊記に、

東都 花咲庵

蔵版

東水亭

剗刷 玉光舎占正

とある。跋文は芍薬亭長根（文政庚辰秋とある）が記している。なお雅  
望の序文は、自筆板下である。

□文政二年六月五日の項参照。

○九月十日、水魚連創立会に出席する。

▲文政三年九月十日 水魚連創立会 撰者飯盛、長根 題月 万八亭

（黒川春村「盡すみれ」）。

□水魚連は芍薬亭長根をリーダーとする上毛在住狂歌師を中心にした  
グループである。雅望は「水魚連」の狂歌会に、たびたび招かれて判  
者をつとめている。

※九月二十日、窪俊満没す。享年六十四歳。

□尚左堂俊満、一筋千杖と号す。通称窪田易兵衛。小伝馬町三丁目  
に住む。画を楫取魚彦、北尾重政に学び、狂歌は頭光に随って、光没後  
伯楽側を主宰した。尚左堂の号は、書画ともに左手で書いたところか  
らつけられた。蒔絵の沈金彫にも長じていた。天明時代から活躍をし  
ていた人物で、雅望とも親しかった。墓は雅望の菩提寺である浅草正  
覚寺に現存する。

○十月、狂歌会の行司をつとめる。

▲狂歌一會大角觥

行司 六樹園大人他十一名

勸進元 花咲庵米守

文政三庚辰年十月

（丸山一彦氏前引論文による）

○十月某日、靈岸島の住居に、隠居所（書斎）を建てる。新居披露狂歌  
会を催す。

▲五老先生の嫡男中村屋清三郎（略）靈岸島湊町川岸に引移りて住居  
し給へり（略）是によりて六樹園先生も其地の奥の方に庵作りて住給  
へり（『永久田家務本伝』卷十二）。

▲靈岸島本湊町中村梅太郎が家に寓居し紙など商ひたり（『名人忌辰  
録』）。

▲あらたに草庵をつくりいとなみて

六 樹 園

たてそめし家居にうつる古翁あるしかほこそあたらしといへ

（『新居狂歌合』）

□文化末ごろに、靈岸島本湊町に移ったが（『名人忌辰録』は孫とともに  
移ったとあるが、これは「嬉遊笑覧」の記事を基にしているが、「諸家人名江  
戸方角分」の記事が、このことに関しては早く、「嬉遊笑覧」の記事は、これ  
を根拠にしているのであろう―文化十三年の項参照）、やっと念願の書斎を  
持つことができたのである。

新居披露の賀筈に連らなつたのは、五側の判者たちをはじめとし、  
狂歌堂真顔・芍薬亭長根・鳥亭焉馬・桜川慈悲成・淮南堂眉住・鈍々  
亭和樽・琴通舎英賀・柳亭種彦・浅草庵市人・中井童堂（腹唐秋人）  
らで、大田南畝は、飛騨国の飯櫃と飯匙に「ひだたくみめでたくみな  
す山もり飯匙とりてきこめし櫃」の狂歌を贈った。

当日の狂歌会の兼題は「松・竹・梅・鶴・亀・鳳凰・宝・富士山・  
七福神・神祇」という縁起の良いものばかりであった。雅望はみずか  
ら判者となった。当座吟は「六樹園」の号にちなみ、六種の植物（公  
家橘・武家桜・農家梅・工家竹・商家松・儒家桃）を題にしたものであつ



た。判者は桑羅園天馬・橘樹園早苗で、この成果は『新居狂歌合』と題して、五側より刊行された。

○十月十八日、孫没す。

▲智玉禪童子（永昌寺過去帳）

□清澄の子であるが、俗名、享年ともに不詳。

○十二月十二日、朱楽菅江二十三回忌追福狂歌会（文々舎蟹子丸主催）の選者になる。

□当日は真顔も選者として会に列らなかつた。兼題は四季・恋・雑であつた。当日詠まれた追善歌は、翌年『菅江嫁々追善狂歌小夜時雨』に収められた。

※十二月二十九日、初代浅草庵市人没す。享年六十六歳。雅望、追悼歌をよむ。

▲浅草庵市人を悼みて

聞なれし琵琶の音色は極楽の雨したぐりと今ぞ知らるゝ（「あさくさく」市人追善集）

□市人は伊勢屋久右衛門という、浅草田原町の質屋で、別号を壺々陳人ともいう。天明六年ごろから頭角をあらわし、寛政末年から萬屋重三郎より狂歌撰集を多数刊行している。頭光とともに伯楽連に属していたが、光の没後、伯楽側を継いだが、のち壺側を結成し、その主宰者となった。雅望とは天明以来の盟友であつた。

○『狂歌友の文車』（三巻・桃溪、定岡画）を三日坊雛丸と編纂して刊行する。

□『狂歌書目集成』には『狂歌友の文庫（花）』とある。本書は雪・月・花の三巻から成り、江戸三神連の蔵版である。

○十返舎一九作・画『続道中膝栗毛』十編に序文を記す。

▲をとこもすといふ日記をみれば、かつをふしにはことわらねと、いももちひもなかりけるとか、いかぬしかひとり行脚きちんとまりも

なつかしからず、あるはいたこ出しまのまこもをわけたる菅原のおしやう様、又いさよひの月にうかれいてゝ、ばざをいふつははやうそくなど長いひちの同行には、こたつきと出くへくや、けにけに旅はみちつれて、馬のあひたるともたちの道くさをくふひさくりけこそきさんしけれ

六 樹 園

□本書は一九の「膝栗毛」シリーズの一冊で、「上州草津温泉道中」ともいう。

○木村忠貞作の読本『太田道灌雄飛録』（六冊・勝川春貞、北尾美丸画）に序文を記す。

□未見。

○『雅言集覧』第二冊を刊行する。

○『晨の露 秀磨追善』（一冊・崑崙画）を撰して刊行する。

□秀磨は六光園秀丸といい、東亭とも号した。伊勢桑名の出身で、江戸下谷に住居した雅望門の狂歌師である。本年八月三日に二十六歳で没した。本書は桑名寿連の蔵版である。

○『新居狂歌合』（一冊・北溪画）を撰して、五側より刊行する。

▲刊記に「右文政三年庚辰十月開筵於新居披講」とある。

□右は十月に隠居所（書齋）を新築した記念に開かれた狂歌会、及び各地の門人から寄せられた狂歌の撰集である。

文政四年辛巳（一八二二） 六十九歳

○正月、『備前国難田浦』六曲園岩垣・六石園飯持撰）に序文、及び狂歌を寄せる。

▲備前国難田浦にすめる関岩垣といふ人、しそくなる酒屋飯持といふ人とかたらひあはせて、とし比あふき奉る同国なる楡伽大権現と住吉の郷神とのみやしるに、され歌しるしたる額つくりてささけ奉らんと思ひたちて、しりたる人々をそそのかしつゝ、歌ともとりありつめつゝ、なにかしけれかの判をこひて、ほいのこと額にしるしてふたつ

の御やしろにをさめ奉りぬとそ、これ見ぬ人のためにとて歌とをも、さなからかきつらねてかうさまの書とはなしつ、そや此人々御神を信じ奉るまめこころのみかは、風流の道をさへすてさんなること、世に物かたりたふときこころさしとこそいふへけれ

文政四年孟春

▲おもしろの駒となつてわらふめりいてやはみなん恋わすれ草

六 樹 園

六 樹 園

□飯持は通称正宗柳吉、名を直胤といふ。備前(岡山県)和気郡難田村の人で、寛政十二年(一八〇〇)に生まれ、文久二年正月十五日六十三歳で没した。狂歌を雅望に学び、俳諧を八千房に、画を武田五峯、また和歌を藤井高尚、本居大平に学んで、一家を成して門人も多かった。著作に『土佐日記書入』『伊勢物語書入』『柳の舎文集』『古今和歌集ひなことば』などがある。号は柳廼舎、梅園、竹泉亭、鶯来屋、亀ト、猿翁と称した。『国学者伝記集成』に「和気郡伊里村穂浪正宗雅敦の弟」と記されている。正宗雅敦は狂名を「唐樹園南陀羅」といった五側の狂歌師であった。

○正月、『狂歌 画譜貌姑射山』(北斎・立好斎画)を監修。また同書に詩、狂歌を載せる。

▲山上西僊人

打碁何上手

双方寿命長

此は無勝負

▲王質か襟袖にかさたもなしをのゝえいかにくちをしと見む

六 樹 園

▲奥付に、

東都 六樹園先生 閑尾 落竹 意庵 前北斎先生 画尾 落竹 意庵 龍廬屋

文政辛巳孟春

東壁堂輯印

(鈴木重三氏「萍水奇画と劇場画史との関連」・「絵本と浮世絵」昭和五十四

年三月、美術出版社刊)

□実は本書を『万国古書展目録』(昭和四十五年五月五日—十日於三越本店)で発見して、メモをしておいたのだが、はからずも十年後、鈴木氏の前記著書で詳細にその内容、書誌的なことを知らされた。鈴木氏の論題で明らかになように、北斎と大坂の立好斎との合筆になる絵本の考察中にふれられているもので、私の能力では鈴木氏の御論をここで容易に紹介できない。簡単に記すならば、『貌姑射山』(仮にA)は、『画本両筆』(仮にB)の出版後に六樹園の詩と狂歌を添え奥付まで変えて刊行されたので、その後本文の狂歌を削り、又Bと同と序と奥付を再びつけて『両筆画譜』(仮にC)を出した。もう一つの考え方として、六樹園が関係した記事を持つAが、BやCに比して稀覯のようになっているので、同じ版木の奥付を持つB・C間に別奥付をもつAを挟むことはやや難点を感じられるので、配りものの狂歌絵本を改題して、絵本として売品用に売り出すのが当時の一般慣習であったことを考えると、AはBに先んじてよいと考える。いずれにしても結論は出せないということである。いささか煩雑な記事になり、鈴木氏の論旨に添わなかったのではないかとという危惧を持つが、私は本書(すなわちA)を実見していないので何も記せない。雅望の詩は巻前に収められており、「山上西僊人 打碁何上手云々」、狂歌は、「王質の襟袖云々」とある(鈴木氏著書より)。(付・その後鈴木氏より直接ご教示いただいた。)

○一月、山田早苗より「狂歌よみそめ代」として一分。

▲『永久田家務本伝』巻六。

○五月、成田不動尊へ五側より狂歌額を奉納する。

▲深川富ヶ岡八幡宮境内ニ而成田不動開帳あり。六樹園門弟より狂歌奉納の事(『永久田家務本伝』巻六)。

▲三月十五日より深川永代寺にて下総成田山不動尊開帳(「増訂武江年

表」文政四年の条。

▲明王の剣は鞘に入まして成田の山におさまれる御代

六樹園飯盛

(成田山史料館蔵)

□右の記事にもあるように、本年三月の成田不動開帳の際、五側社中より狂歌額を奉納したのである。この狂歌額は成田山史料館に現存する。同額によると題は「四季混雑」で、巻末に「文政四年辛巳五月五」とある。額の回りには「五」印を刻して、造りも豪華で、奉納額にふさわしいものになっている。ちなみに作者を掲載順に記すと、

三尺庵二廬・萬徳成・歌延亭繁樹・竹廼屋虎住・春廼屋成丈・宝市亭升成・福廼屋内成・止々亭犬馬・陶々亭催馬・龍水亭強氣・夷福亭宮守・花園亭麟馬・麴街園北住・山下園喜笑・目出鯛ノ升・室町中澄・養老人龍成・夷軒哥歌根・雪竹園如弓・六帖園雅雄・緑樹園元有・蔵器園長人・初心亭早丸・射柳園軒風・素羅園天馬・橘樹園早苗・獨楽堂高盛・竹房白酒・悟智窓腹満・司馬園盛砂・塵外樓清澄・市川三升・文々舎蟹子丸・臥龍園梅丸・六樹園飯盛  
ら三十五名である。

○六月、窪俊満の狂歌碑を向島法泉寺境内に建てる。

▲『永久田家務本伝』巻七。

□前年没した俊満を追悼して、雅望が主になって狂歌碑を建てた。この記録は管見によれば、右引用書以外見ない。なおこの碑は現存しない(筆者は東京在住時代同寺を訪ねた時確めたし、また住職からも確認を得た)。

※七月二十六日、腹唐秋人没す。享年六十四歳。

□中井敬義、通称嘉右衛門。菫堂と号した。日本橋本町在住の商家の番頭であった。大屋裏住とともに、本町連の中心として天明初期から

活躍していた。狂歌の他島田金谷の筆名で、洒落本『葉軌本紀』があり、また狂詩もよくし『本町文粋』(天明六年の項参照)がある。そのほか書も巧みで、江戸の三右衛門の一人といわれた。別号に星春、小笠山樵、宣松老人、蠅虎などある。

○八月十日、尾代弘賢(輪池)に、その妻の死を悼み八千代饅頭を贈る。

▲文政四とせ葉月はじめの四日に妻のみまかりしあくる日(中略)十日石川雅望が許より八千代饅頭といふくわしををこせければ申遣ける。

七十にたらて身うせし妹が為やちよと聞もかひなかりけり

(尾代弘賢「心のうち」)

□妻加藤氏は六十九歳で没した。弘賢はここで改めて記すまでもなく、当代名高き和学者である。雅望と交流があったことは当然のことであった。弘賢はのちに『雅言集覧』の稿本を雅望に乞うて書写している(文政十年の項参照)。弘賢は狂歌にも通じており、しばしば狂歌会にも出席していた。また彼の狂才に関して、滝沢馬琴はつぎのような挿話を伝えている。

文政十三年七月二日、京畿大地震、十三日の頃まで昼夜止まず、二條城をはじめ神社仏閣破損多く、死者も少からざりし由にて、十二月十六日に、天保と改元あり、或人、地震によりての改元に、天のみ保ちては地はたまたざる様なれば、この後も猶地震はやむまじといひければ、屋代弘賢答へけらく、天は地を覆ふ故に天保たば地もたもつべしとて

天地のたもつと聞けば君が代の静けかるべき年の名ぞかし

弘賢またいつの頃にか、諸葛孔が陣鼓といふ物を見たる折

あなめづら見ぬ唐土のもろくづがせめの鼓にけふ見つるかも  
とよみたるを大田蜀山がききて、戯れに

あな小づらかだみよじ下の

弘賢がまよのなきよみ今日見つるかも

と詠れたりとぞ。屋代弘賢の邸は神田明神下に在り

〔著作堂雜記抄〕

○秋、樗寺（正覺寺）縁起を栗原信允の画を得て奉納する。

▲卷末に「文政四年辛巳秋月日 栗原信允画」とある。

□詳細は文化十一年の項参照。栗原信允（寛政六年—明治三年）は、故事家で屋代弘賢、柴野栗山に学んだ。樗寺縁起に画を描いたのは、屋代弘賢の紹介であつたかも知れない。信允はこの時二十七歳であつた。

○『菅江追善狂歌小夜時雨』（淮南堂眉住撰・北溪画）に、菅江追善歌を載せる。

▲回向して皆人鼻をかみな月時雨もけさはなくやうにふる

六 樹 園

□文政三年の項参照。

○門人畑零餘子の追善狂歌集の判者になる。また同書に序文・追善歌をよせる。

▲『草のはら 零餘子追善』

序文

はらわたを断つはこれ秋の天なりとは、からくに人の詞とか、あるをみるたにとは、はやうむかしの人ぞよみたりける、いでやかゝるかなしき時にしも零餘子の君はかくならせ給ひぬ、さるはかたぶく月のをしきのみかはと詠みにし、はつきの十六日にて、ぐあんじの物語にしているして、夕顔の君のきえはてさせ給ふける時、ひとつ日にぞおはしける男君はさらなり、さぶらふ人々たれくもあけくれの夢にまどふこゝちやしぬらん、かくて御法事のわざなどすくして、とのゝうちくおきてさせたまへることとて、けいしなる人の子に仕となる人、しりたる友だちをそゝのかしつゝ、調度によする哀傷の歌どもをぞあつ

めたる、おのれあす知らぬ老の身ながら、けふは人こにうちこめかれてつらしといへる秋の夜の露けき袖をしぼりつゝみたりがはしき鳥の跡を、このはしつかたにかいつくるになん

刊記

右文政三年庚辰集翌四年辛巳冊成被講畢

判者 集者

六樹園翁 彷徨亭仕

▲かたみわけくはるたんすのひきたしもむなしきからとはるにかなしき

六 樹 園

□畑零餘子は江戸牛込に住み、景山亭、芳香園と号した若き女流狂歌人であつた。文政三年八月十六日二十八歳で没した。この追善狂歌には、三百二十八人七百八十四首の追悼歌が寄せられ、うち百五十六首が収載された。『狂歌五十人一首』（文政二年刊）に、零餘子の肖像が載せられている。

○『雅言集覽』第三冊を刊行する。

○『新曲撰狂歌集』初編（三卷・千春、北溪、英山画）を編纂。序文を記して刊行する。

▲和歌はあがれる代の伶人が袖うちふりたるに似たり狂歌は今の歌舞伎役者のちりからにて踊るが如し雅楽は風をうつし俗をかふの徳はあれどつれくがひが耳にはなんと鐘呂の芝居にて太平楽の寝たなりも事かいな申には劣るといふべし此二巻は例のすき人たちの狂言にてかの優なりといふみやびたる歌はとりおきてたれが耳にも大入の芝居の正本なれば大切までの神祇釈教恋も無常も題にて知るべし其爲口上さやうにと先づ序びらきの幕をあかせつ。

□版元は大坂の塩屋長兵衛である。後編は翌五年刊行された。なお『国書総目録』には『新曲狂歌撰集』として記載されている。

○『夷曲とし俵』に、十返舎一九ともに序文をよせる。

▲序文は略す。

□本書は大湊舎田原船積の家集である。船積は本姓大竹氏、通称高浜屋三左衛門という、江戸小網町の船問屋で、文政三年十月十八日に没している。

○この年、七世市川団十郎のために願文の代作をする。

▲願文は「年譜稿四」の寛政九年の項参照。なお雅望自筆は中村幸彦先生御所蔵。

□成田山新勝寺と市川家との関係は、ここで改めて説く必要はない。右雅望代作の願文は、本年団十郎が感恩報謝のため、新勝寺境内に間口十八メートル、奥行九・六メートルの瓦葺絵樺入母屋造の絵馬堂を寄進した際のものである。この絵馬堂には、彼の演ずる舞台姿を華麗な大絵馬に画かせたものがある。これは長唄所作事「石橋」の図で、筆者は歌川豊国、横一・四五メートル、縦一・九二メートルの大きさで、文化十一年の出開帳の際寄進したものである。新勝寺は仁王門、一切経蔵、客殿、庫裡の再建築を行い盛んに堂塔の整備を行ったが、その費用捻出のために文化三、文化十一、文政四、天保四年と四回にわたり、深川永代寺で出開帳を行った。先の五側より寄進された狂歌額もその際のものである。

この年以後、成田不動の信者がさらに大きな団十郎の舞台姿を著名絵師に描かせて奉納したので、ついに文久元年（一八六一）に第二の絵馬堂を建立せねばならなくなったという。そしてこの二棟の絵馬堂には、歌川豊国、国芳、鳥居清満、谷文晁などの著名絵師が描く絵馬が掲げられた（『成田山史』、『成田名所図会』、岩井宏美氏「絵馬点描」・同氏編『絵馬秘史』NHKブックス・昭和五十四年三月刊収など）。雅望は文政五年に成田山参詣旅行をしているが、これも前述の願文代作が、その契機の一つとなっているのである。

文政五年壬午（一八二二） 七十歳

○一月十三日、山田早苗より「狂歌よみそめ代」として一分。

▲『永久田家務本伝』巻六。

※閏一月六日、式亭三馬没す。享年四十八歳。

○春、『狂歌評判記』の判者になる。

▲見返しに

文政五年午の青陽 会主 塵外楼清澄 宿屋飯盛翁判とある。

□本書は五側の狂歌評判記で、三百二十八人の作者が収められている。別名を「狂作者目録絵入」ともいう。

○三月二十六日より四月二日まで、成田・常陸江戸崎へ旅行をする。

▲四月七日出生。六樹園先生、塵外楼、梅太楼、竹房、早苗、供二千（寄）ヲ俱シ御（寄）候、成田・筑波・鹿嶋・銚子旅行 金三両路用（『永久田家務本伝』巻六）。

▲『成田紀行』（神宮文庫蔵・写本）による。

□同行者は息子清澄、孫梅太郎、門人の山田早苗、門人であり孫娘（とよ）の夫である竹房白酒、そして従者の五人である。いま『成田紀行』によって旅の概略を記しておく。なおこの旅の意義や背景については、拙稿「石川雅望作『成田紀行』（神宮文庫蔵）の解説と紹介」（『高知大國文』第八号、昭和五十二年十二月、高知大学国語国文学会）において輪述しているので参看されたい。

○三月二十六日 永代橋―万年橋―小名木沢―中川の関（船番所）―行徳―葛西―船橋―大和田泊。行徳で「かしこにてひばりやあがる塩がまのけぶりへだてて声のきこゆる」と詠む。また大和田への途上、放牧の馬をみて「若ごまのあそぶ春のにつながれて道ゆく人のあしもすすまず」と詠む。同じく大和田宿で「ささのやはおとせぬものを旅人のむねにぞびびくけふの春雨」と詠む。

○同月二十七日 大和田―上野新田―白井―佐倉―酒々井―中川―成

田泊。佐倉で門人の成俊（所伝不詳）、栗々庵万磨を訪問する。

○同月二十八日 成田―土屋村―押畑―新妻―芦田―荒海―磯部―源太河岸―大田―小野―江戸崎泊。成田山に参詣。また滑川観音にも参詣する。江戸崎にて、雅望の有力な門人緑樹園元有（「新撰五十人一首」に「常陸江戸崎商家 元有字隣卿号緑樹園 商元有 俗称小林平七郎」）と長人（「狂歌人名辞書」に「蔵器園長人 通称未詳 常陸江戸崎緑樹園門人 天保四年四月十四日没す 年五十二」）に会う。

○同月二十九日 江戸崎泊。早苗はこより筑波、鹿嶋へ旅立つ。江上山瑞祥院、大念寺、医王山不動院を参詣。此地にて葬列をみて「なき人をおくるとみればきのふよりつゆけさまさる旅衣かな」と詠む。

夜、常成（緑酒園常成・「狂歌評判記」）、言吹、秋成、上風（常州江戸崎人 号花信園秋上風・「狂歌人名辞書」）、音澄、糸長（緑楊園糸長・「水魚大会狂歌合」）、実吉、春風らが訪ね来て酒宴となり「ひたちには男のみあらずざれ歌のをかしきふしもつくるますらを」と詠む。

○四月一日 江戸崎―羽賀村―松山村―伊佐津―狸穴―中山―曾根―堀割―加納―六軒―堀作―亀成―白井泊 曾根で見送りに来た元有と別れる。

○四月二日 白井―鎌が谷―八幡―行徳―箱崎―自宅

以上が成田旅行のあらましであるが、七十歳の老服を旅にかりたてたものは、単に江戸市民の成田参詣という信心をかねた行楽だけではなく、前年成田不動へ奉納した狂歌額のことや、同じ年に七世団十郎の絵馬堂寄進のために願文を代作したことや、五側の有力判者や門人たちの在住する常陸江戸崎方面を訪問することなどが、その動機として考えられるであろう。なお早苗は「四月七日出生」と記しているが、これは早苗の記憶違いである。

○四月、帰宅後『成田紀行』を執筆する。

▲神宮文庫蔵による。巻末に「文政五年壬午四月 石川雅望」とある。

る。

□本書は写本で神宮文庫に伝わり、他に伝存しない。識語によると、伊勢神宮の神官で、国学者でもあった孫福弘孚の手に、竹房白酒（成田旅行に同行した）の子孫竹屋政蕉が持ち伝えたものである。識語はつぎのように記している。

是は江戸赤坂竹屋政蕉が逢来て広く送りよこせし也。文中は別におかしきふしもなけれど、めづらしきものぞ写し置ぬ。此政蕉は文中にある竹房といふ人の子孫なるべし。原本に竹房蔵書といふ印を末におしたり。先代の書きしままを送りしものなるべし。

荒木田弘孚

○五月、『狂歌水滸伝』に跋文を記す。

▲撰狂歌社中僞傑。此水滸棄裏英雄。彼是義膽忠肝。此是錦心繡口。其類雖異。至拔萃出群。大獲美譽。為衆所推許者。共一而已。嗚呼泰平樂事。可謂有笑無慄矣。

文政五年壬午夏五月識於靈巖島北窓

六樹園主人 〔五老〕 〔六樹園〕

□本書は塵外楼清澄、江都園、福廼屋撰（定岡画）になる五側の評判記で、五側の狂歌作者百八人の肖像画が描かれている。百八人という人数は、いうまでもなく『水滸伝』中における梁山伯につどう百八人の豪傑にちなむ。

※六月二日、鳥亭焉馬没す。享年八十歳。

○七月二十七日、孫吉六郎生まれる。

▲文政五年壬午七月二十七日生吉六郎誕生（六樹園自筆忌歴録）中「雅望自筆誕辰記録」中村幸彦先生御所蔵

□清澄の息子になるが、没年不詳。

○八月十五日、信州の蘭蕪亭蕉の需めに応じて、蕉一門の観月の狂歌を撰する。また狂歌を詠む。

▲月を見る名どころ多きそが中におやの親なる姨捨の山

東武・六樹園飯盛

右事項は浅岡修一氏の御示教による。同氏によると信州松代の蘭蕙亭薫（寛政二年—明治三年）および彼の門下の観月の作を薫の師である雅望が撰をしたもので、この掛額は姨捨山の放光院観月堂に奉納されたことである。しかし、現在所在不明になっているとのことである。だが幸いなことに、故飯島花月翁が、その概要を記しておいてくれたので、左に抄出することにする（信濃毎日新聞・昭和四年九月一八日の記事）。

姨捨山—観月堂の掛額— 飯島花月

（略）ここは文政五年即ち今から百八年前此観月堂に掲げられた狂歌の額一面が存して居る。松代藩の狂歌の宗匠蘭亭義信と其門下の達吟者共との観月の作を、江戸宗匠六樹園飯盛の選を得て六樹園翁の追吟と共に、翁の肖像及び一同の画像と吟詠とを、絹本極彩に画かせ額面に製し、観月堂に奉納したもので、明治の中頃まで堂の片隅にくすぶって居たのを、偶々寺から古物商に売却し、之が此額の奉納者で且作家の一人たる蘭蕙亭泉（稻荷町田中大右衛門）の長男同名の田中大右衛門の手に帰し、同氏生前拙者に贈られたから、改装して家蔵して居る。画像の筆者の名は無いが、北斎門下の北溪あたりかと思ふ。狂歌の筆者は蘭蕙亭即ち松代藩の祐筆間庭平左衛門其人であらう。印章があるが判明せぬ（略）額の裏面の記文は、左の通り読まれる。

六樹園 東武 石川五郎兵衛  
岸島  
蘭蕙亭 信州 田中大右衛門  
荷山  
鳴海 同松代 堀内文太郎  
真琴 同更級 湯本宗重  
満山 同稻荷 保柳儀三郎

仕候 同所 小出辯了

かほる 同所 窪田富之助

行宜 同稻荷 笠井茂右衛門

蘭蕙亭 同松代 間庭平左衛門

文政五壬午歳八月十五日姨捨山放光院月光殿工奉納

願主 蘭蕙亭源泉

此まゝに幾世の秋も契らばやならぶ田毎の月の友垣 蘭蕙亭 義信

田毎なる稻葉の露の水かねに磨きて光る更級の月 柏林亭 行宜

あかなくに月を隠せる富士がねは人の老せぬ葉ありけり 蘭陵亭 美酒

松風に興をひかせて簾雪かゝぐる月のみやこ上臈 蘭花亭 かほる

とりくに姥が手織の絹機をいくたび水に更級の月 八十五翁 陸面水仕候坊

ほしの穴ひとつも見えぬ望の夜は錐たつる地も無き月の山 蘭香亭 満

ながめめる人も田毎に影見えて月に賑ふ更級の里 松風亭 真琴

月の出る山はかしこと昼よりも風に指さす峰のをすゝき 滄亭 鳴海

入れ歯まで石となりたる老が身は月に昔を偲ぶ姨捨 蘭蕙亭 泉

月を見る名どころ多きそが中におやの親なる姨捨の山 六樹園 飯盛

この額の画像は、その人柄、職業に応じて、士人、医士、商売、隠

者等にそれぞれ描き分けてあれど、顔面は皆類型的で、肖像ではない。多分江戸で作者に面識なき画家が、かいたからであらう(略)。

浅岡氏によると、この奉額は昭和四年当時花月翁の手元にあったとのことである。飯島花月は改めて記すまでもなく、江戸文学研究家であり蒐集家として高名であり、その蔵書は長野県上田図書館に花月文庫として収蔵されている。なお「蘭香亭満」は花月の祖父に当たる。

○十二月二十五日、信楽楼で開かれた狂歌会の判者になる。

▲文政五年十二月廿五日於信楽楼上開卷(『狂歌三十六歌僊』卷末)

□この会の成果は、翌年『狂歌三十六歌僊』と題して、反古堆跡成蔵版で刊行された。

○『碓氷のいしふみ』(一冊・岳亭画)を浅江園とともに編纂、かつ序文を記す。

▲上野に松枝とは鉢の木のうちひに聞きしりつ、ここにひねりし茶廊といふ人、ひぐらしにまじる松風をも琴のしらべにきくなしつゝ、家の名にさへよぶこ鳥、たつきもしらぬうすひの山に、をちこち人のたはれ歌をあつめて、ここに石ぶみをたつべしと思ひたちぬ、そも吾つまはやのむかしは、かしこければとどめつ、祭るところの熊野の靈験この山と共にたかく、神の使のからすのはね石、ゆくての道のけはしきをたすく、またさだみつの社にいのれば、ひはぎのなんをまぬかるなど、いひつづければ、長坂の足より口やくたびれなん、かかるめでたき峠にしもことの葉どもをとらならべて、風ふきぬともちりうせぬ、石にしもありてすゑむこと、此あるじの功にして、その名は此山と共にながき世につきぬなるべし、おのれ此茶廊の風流に感じ、かつ物ずきのみやびたるをほめものして、ここにやたての口ひらきて、あさまの山のけぶりぐさ、しりかけながらくゆらすになん。

□茶廊のために編纂した狂歌集である。茶廊は、上野園松井田宿新堀に住居する庄屋で、本姓細矢氏、俗称を由太郎という。名は方穀、字

は富卿、号を松風舎といった。水画、盆画に秀でて、左利きのため左文堂とも号した風流人であった(『狂歌奇人譚』三編上)。

○『新曲撰狂歌集』後編を刊行する。

□文政四年の項参照。

○『雅言集覽』第四冊を刊行する。

○松寿楼長年(二世鳥亭焉馬)の合巻『活金剛伝』(二編二巻・歌川国芳画)の初編に序文を記す。

□長文なので略す。永年は通称山崎宵次郎という与力であった。狂歌は五側に属していた。文久二年七月二十三日七十三歳で没した。二代焉馬を襲名し、七国楼と号した。雅望はその時、つぎのような披露の文を寄せている。

水中より馬を生ずといふこと唐國の書に見えたり、こはまこととおぼえざりしが、ちか比本所なる堅川に一匹の馬を出つ、此ごろ八町堀にもまた馬を生ずるを見つ、此の馬世に稀なる駿馬にて、たちち名を千里に走らす、我友にあまたの伯樂ありて、ひとしく此良馬を相して、筋骨形容の風ならざるを讀て、これを戲笑の歌にとりなしつ、予もまた此しり馬にのりてともにたいこをたたくになん。

○『文政五十六樹園月次狂歌合兼題』(二巻二冊・岳亭定岡画)を撰して刊行する。

□五側社中の配り本で、毎年刊行していたものと思われる。日本大学総合図書館蔵による。

○『楚漢狂歌合』(中一冊・春の屋成文編、定岡画)に序文を記す。

▲歌あはせは右ひだりにつがふを例とす。狂歌にてはすまひの番付といふものにならひて東西とはなづくめり。本町のひとつらことし彌生二十一日衆議判といふ事とりいとなみてよみ人をかたわきてさほふるはしくぞかまへたる東西とよばんもふりにたりとてこれを楚漢とあらためかへて名たる英士をたゝかはせつ。題もから國の演義めかして



いとことやうにぞ物したる。さて千斤のかなへをあぐる人三尺のつるぎをはく人おのがしゝ名のり出てちから山をぬかんとすれバ沢中に蛇をきるものあり。あるハ雉水の勝にはこるあれバ関中にとゞいるありてその功とりゝなるを集めてかく通俗の青表紙とぞなしたる。こハまたく春廼屋のあるじが催促にしたがひてかくこゝら狂歌はつはものハあつまりたンなり。さハ司馬子長も斑孟堅も夢にだにみぬ乱声にてうちおきくにもいさましく興ある凱歌のこゑになんありける。

○十二月二十五日、信楽亭において狂歌合を開く。西来居未仏とともに選者をつとめる。同席にて狂歌を詠む。

△文政六年の項参照。

文政六年癸未（一八二三） 七十一歳

※四月六日、大田南畝没す。享年七十五歳。

※八月二十九日、東夷古渡没す。享年五十歳。

□古渡は『狂歌人名辞書』によると「通称林和助。はじめ江戸市ヶ谷に住み、のち京橋数寄屋町に住居。菅江側の判者で、西来居・南亭・北斗庵とともに『東西南北』の四大人と呼称された」とある。市ヶ谷に住むとあるが『諸家人名江戸方角分』によると、市ヶ谷田町（文化末）に住み、その前は「赤坂一ツ木」に住居していたようだ。また同書によると「乙訓屋太郎次（治）」とも称せられていた。

雅望とは親密で、彼は、

或年の秋東夷庵古渡の旅立すと聞きて

我がすがる袖をはじめて出女のいくたび引かん旅の夕暮  
名をなほの鳥さへ来るをかりくゝと囁つゝ去る旅の乾飯  
と送別の歌を詠んでいる。また「古渡を送る詞」（『狂文吾嬬那万俚』）  
『』を贈っている。

○九月某日、山田早苗より古稀の祝儀として一分。

▲未九月 一金壹分 六樹園古希寿 祝儀として（『永久田家務本伝』卷六）

□祝儀を贈ったのは、九月二十日の賀宴での席上であつたかも知れない。

○九月二十日、柳橋大のし楼で七十賀宴を開く。

▲六樹園飯盛 俗称石川 文政九月廿日 五郎兵衛 今茲 七年 柳橋大のし楼にて七十算賀会筵に余が歌を乞はれければつかはしける

ときは木の臼になるべき齡までつくともつきじ君が賀の餅

▲六樹園飯盛翁古希賀 文政六年未年九月廿日於大のし楼賀筵会ニ付 橋樹園早苗心斗祝ひの詞を呈候  
（『滝沢馬琴「著作堂雜記抄」」）

まことや六樹園尊師はひさごより出けん馬喰の町生立給ひてそも御姓は千代に八千代にさざれ石の石川の流れなり。そそぎあげしみやび詞はあまたの書に出て世にしれし実に古学の仙にてぞあはしけん。ことしはのりをこえずとけふ御としにわたらせ給へれど乗物の雲助にて北へやはしらせん南へやはしらせん。又は旅路をがちにてゆかましかばよもぎが桜やもはだしなるべし。ある時は舟に棹指して戯場の市川あたり三角の雪ふりに興じ金公もしらぬ滝登りの鯉又は彭祖もしらぬ菊蝶などになぐさませ給ひて西王母東方朔の東西の棧敷に至り給ひて夜目遠目にも役者付の替名もよみ給へり。一陽来福の時は養老の泉花が浅漬と云物などめで給ひけり。いでやけふなん千とせをのぶる菊月二十日此門に遊ぶ戯笑歌の仙人たちつどへて師仙が不老ふしぎにあえるよしと亀の尾の永き柳橋のほとり鶴の翼の大のし楼にいぎなひぬればかかる筵を四方の君達聞伝へてつどひ給へばたかどのもゆるする斗なり。御妻子孫彦までおはせり。御うるはし君には梅松竹を御名によびつけ給ひて彦君の口とかにあいぎやうつきていだかれおはすもいとめ

でたし。かかいかうさかえさせ給ふことをいはいましとおのれもとこよの橋亀をし給したる羽織着てはひきせて猶万々年もとことほぎきこゆるになん

蓬萊の宮殿なれや君があたりせおひてこゆる亀鶴のはし

いく千代もあかずみるらん世の人の言葉の花の山にあそびて

（『永久田家務本伝』巻六）

□ここにめでたく古稀の賀をむかえることになった。天明時代からの盟友が相次ぎ不帰の客となり、今年も師であり、良き理解者であった大田南畝も身まかった。雅望の胸中は何が去来したであろうか。管見によれば、雅望自から今日の佳日を記録した資料は何も無い。後年（文政十二年）の大火によって、あるいは灰燼に帰してしまったのであろうか。

会場の「大のし楼」には一家眷族、知友、門人たちが多数集い一層はなやかなであつたらう。とくに山田早苗が記しているように、曾孫もできてまことにめでたい限りであった。この曾孫は孫の「とよ」と門人竹房白酒との間に誕生した女子であらう（年譜稿四・二三頁）。また「御妻子」と早苗が記しているのは、後妻の「りき」のことであらう。

馬琴は珍らしく、当日のことを記しているが、引用した『著作堂雜記抄』の「文政七年」は「文政六年」の誤りである（『自撰自集雜稿』は「六年」となっている）。

○十月二十七日、柳橋大のし楼にて、籬菊丸一周忌追福狂歌合の選者をつとめる。また追善歌をよむ。

▲籬の菊丸をいたみて

六 樹 園

菊のはな手向たる庭に幽霊の白衣の人よおはしませがき

□菊丸は文政五年十月十七日五十八歳で没した。『諸家人名江戸方角分』に「二世号朱楽館 本湊町 丸屋伝次郎」とある。『狂歌人名辞

書』には「通称丸屋信次郎」とあるが、「伝次郎」「信次郎」いづれが正しいか治定しにくい。菊丸は五側の有力判者である「臥竜園梅麿」の弟で、晩年は本所に住んだ。菊丸はかつて師の朱楽菅江の名跡をついで、二世朱楽館と号したが、のちこれを返上して五側の判者となった。

○十一月二十一日、遠藤春足より『宇治之須佐備』の初稿を送ってくる。雅望、春足を激励する。

▲宇治のすさび大感心、面白く覚え候。今四五冊ばかり有之候はば猶よろしく存候（文政六年十一月二十一日付、春足宛書簡）。

□本書は企画にとどまり刊行されなかった。

○『朝衣』拾遺（横井也有著・石井垂穂編）に序文を記す。

▲也有翁の著述のふみ鞠ころもにつきぬとおもひつるに猶かゝるめでたき錦繡のかゞやける衣ぞのこりたりけるいでやさかさまに着し朝服より葛巾山服の老の末までさる斑爛のいろにほこらずてゝからふふたのゝいやしきをすてず常談俗語にこゝろをやりて常のすさみとせられしはづきにさらすほしきぬのすぐれてたかきこゝろとぞしられたるあはれ六徳そなへし君子にておはしけるを十徳きたる俳諧子とのみおもふめるはばくものをのみにふれしふるぎの市のふみちがへなりけりそもくこのふみはなごやなる垂穂ぬしの簞笥のそこにかくしおかれしさいでなるを袖おほくびとりならべて終にたけある衣とはなしつとぞかゝるみけしにおのれらが墨つくべくもおぼえざれとふるきとくいのはこはるゝまゝに此はたぞてをかいけがすもじちにかり着のまへしりへ身にあひがたきことになむ

六 樹 園 主 人

□右序文は架蔵本によった。序文の板下は雅望自筆である。かねて知遇を得ていた尾張藩士の石井垂穂より序文を乞われて叙したのである（『石川雅望の「草まぐら」の旅』・「文化元年の石川雅望―年譜稿五」参照）。

『鶴衣』拾遺は、垂穂が祖父楚巾、実父文芦と三代にわたる知遇を感謝して、故人の文章断片までも多年蒐集して編んだ『半掃庵也有翁筆記』を底本として、前後編に洩れたものを収録した書である。

○大田南畝の葬儀に参列しなかったことを批難される。

▲蜀山人の高弟なる宿屋飯盛は、蜀山人死亡葬送の時にいかず、師恩を忘却したるは馬琴と一対の不義にて、人倫と云ひがたし（山東京山『蜘蛛の糸巻』）。

□このことについては諸書には見えず、ただ右に引用した京山の記すところだけである。京山は雅望を「馬琴と一対の不義にて」と書いているが、これは兄京伝の葬儀に馬琴が不参したことを指している（文化十三年）。

雅望が南畝の葬儀に不参したとは考えられないが、もし何かの事情で不参したとしても代参させたと思う。ただ雅望側に南畝の死に関して、何の記録も残っていないことに不自然なものを感じる。

○『雅言集覽』第五冊を刊行する。

□送り状によると代金は銀十二匁五分であった。私家版であるため意外と高額である。

○『狂歌笛竹集』（半一冊・京伝・三馬・種彦・焉馬等画）を撰して刊行する。

□『狂歌書目集成』による。本書は狂歌絵本の一冊である。該書に関する焉馬の雅望あての書簡がある（文政二年参照）。

○『狂歌萩のしをり』（半一冊・北鼎画）を撰して刊行する。

□『狂歌書目集成』による。同書によれば長門玉萩連の蔵版である。

○『狂歌三十六歌選』（半一冊・岳亭定岡画）を西来居末仏と撰して刊行する。同書に序文および狂歌一首。

▲序文（自筆板下）

三十六官は唐土のしいたけたばにて、三十六坊八天台の坊主あたと

か、三十六禽のほか、三十六鱗の鯉あり、丈山翁の六々堂、左右にわかすまひ人の土俵のかずハ三十六、そのおくの手の三十六計、はしつてありく日光みちハ江戸から三十六里にして、一里三十六町なり、北極地をいづること三十六度四ふんどの、いちかハなにがしがつらねのとはり四條大納言の歌僊いらいこたびの狂歌の三十六首、これで二どだかあゝつがもないと上下の歯牙をならしていふ

六 樹 園 主 人

▲狂歌三十六首の点あへてかへしつかはすとして

てる月のひかりたつねてきた山の影法師にもはつる秋の夜

▲見返し

六樹園先生 撰

西来居大人

狂歌三十六歌僊

吾社軒折安

杜廼屋仲貫

玉光舎占正

反故堆跡成

輯

▲刊記

文政五壬午季十二月廿五日於信楽楼上開卷

揮毫 北栄子捨魚

画図 岳亭定岡

雕工 玉光舎占正

反古堆主人蔵

□本書は刊記にもあるように、昨年末の狂歌会の成果である。内容は下三分の二に三十六名の五側有力作者の肖像に狂歌を付し、上三分の一に他の作者の狂歌を記してある。柱に五の印を刻しているの、五側の「肖像入狂歌撰集」であることがわかる。本書は五側の勢力範囲

を知る資料として価値がある。

○籬菊丸追善集『籬の幾久』（臥竜園撰・一冊）に追善歌入集。

□文政五年の項参照。

○紀平佐丸撰、浅香勝躬編『狂歌五十人一首』に序文を記す。

▲なにはの海おきつしらたまはやすくとり得べきにあらず。さるを浅香勝躬といふ人あさからず。おりたちいとなみて、小舟のつなでくりよせてあみのめのもらすことなく浜千鳥のあとをとめつつ汐のひがたのかひくしく千尋の底をさぐりものして、からうじてこゝらのあこやもとめいだしつ。さてしも磯辺にあさる鶴廼屋の翁がもとにもてゆき、たみをつくしのふかさあさとりえはらせつ、つひにかうさまの書とはなしぬとか。さてなんたぐものけぶりがたくなびきて、よせくる波のおときさへをちのさとまで聞えわたりにたる。おのれとほきわたりにすまひぬれバ、かゞやけるしらたま見るによしなし。されどあなかに乞はるゝまゝに、いてやかけんもかしこしとハおもひながらのはしつくり、あとなしごとをならぶるになん。

□かつての門人鶴廼屋紀平佐丸のもとに應じて序文を草したのである。本書は文化十年刊の同書名と姉妹編で、平佐丸社中の肖像入人名録である。千里亭戴虎（扇屋利助）編『狂歌道の栞』（文化八年刊）とともに、浪花狂歌壇の趨勢を知るのに格好の資料である。なお『狂歌五十人一首』について、水田紀久氏が「あづまぶり鶴の一群」化政期北撰の狂歌結社「鶴の側」について」（『国文学』昭和四十九年六月・第五十号、関西大学国文学会）と題して、詳細に論じておられる。

文政七年甲申（一八二四） 十二歳七

○二月二十二日、孫没す。

△盛遊禪童子（永昌寺過去帳）。

□俗名、享年不詳（文化十三年の項参照）。

○二月末、疝氣を病む。

▲おのれきさらぎの末がたより疝といふやまひにかりてかしらあぐべうもあらねば（『狂歌現在奇人譚』初編序）。

□「疝」とは漢方でいうところの「下腹痛」である。老齢のため文化元年に旅先で病んだものが再発したものであろう。

○三月十九日、両国の万八楼にて水魚連狂歌会が開かれる。雅望は芍薬亭長根とともに選者になる。また狂歌を詠む。

▲『水魚大会狂歌合』（東北大学図書館野文庫蔵）、『永久田家務本伝』巻六による。

▲鯛のみかひるこの神にみちのくのえひすのつりし鮭もそなへん  
□『水魚大会狂歌合』によると、会主は白毛舍万守、至清堂捨魚、花咲庵米守、宝市亭升成である。水魚連とは五側と芍薬亭長根側の連合体である。

○同日、山田早苗より水魚連狂歌大会に祝儀。

▲三月十九日、一金貳朱 六樹園さかな代（『永久田家務本伝』巻六）。  
※三月二十二日、鯀形蕙齋没す。享年六十四歳。

□本性赤羽氏、北尾政美、名紹真、字子景、俗称三二郎、号蕙齋、杉阜、狂名麦野大蛇麿、黄表紙の作者名を氣象天業という。津山侯の御抱絵師。後年母の姓鯀形氏を名のる。浮世絵師としての活躍はいうに及ばない。狂歌撰集にも挿画を多く描いており、雅望との親交も篤かった。

○五月、『狂歌現在奇人譚』（八島定闇著・画）初編、三編に序文を記す。

▲初編序文

岳亭のぬし奇人譚といふふみつくりてこれにはしかせよといひおこせつ。おのれきさらぎの末つかたより疝といふやまひにかゝりてかしらあぐべうもあらぬはをこたとハなしにさなからにうちすくしつ。しかるにけさのほとまた人おこせてゑりいたすへてそろひにたり。い

かにくせたとむるにかしらいたくて筆とるへうもあらねはいふへきことのもいてこす。ことにこのふみいまためにたにふれされはいかなることのあるやらんゆめちをたとるやうにおほえておほくしきもひとかたならず。しかはあれとつねにこの人の筆つかひはおほかたにしりてあれは人々のつたへなどのへいはんには司馬子長にもいかでたとらん。いちやうやうあるふみにこそとおもへはうちおきかたきことにおほえてあやしきこしのはひみさりつやうにすゝりひきよせつ。ともかくにも老ほけひとのみたりこときゝわくる人もあらさめればとなからはかりにかきさしてやみつ。かくてもこのふみのはしつかりとなしてんや。みなからもしれくをこまききこゝちそせらるゝや。

文政七年五月

六樹園主人

### ▲ 三編序文

人のつたへをあげいつることはやうのためしおほかり。その中に五柳先生の伝醉吟先生の伝などはみつから作りものしつればたゝそのかみのわたらへのすちをこゝろのまにくあけいつるのみにてしちに一期をしるせる伝記にはあらず。いま岳亭ぬしのとりあつめられしつたへこともまたこれらにならひたるへし。そのことのまこといつはりはしらねとよみ見るにおかしく興ふかゝるはしねんに作者のこゝろはへみえてたくみなるさまのなみくならぬはおほよそひとのおよふへきにあらず。いてや我國もひとのくにも人のうへのつたへをあらはせるふみともむかしよりさはなれとしもかしもなる人のうへまではたれかはとり出てあけいふへき。岳亭のぬしのことくすきくしくあされたるかたにも心をやりてかくれたるくまをさへかいさくりもとめ出る人ならさましはいかてかゝるめつらかなる書をしもくつしいてゝかきつらね物すへからむ。此ふみにはしきせよとはれてものめてのこゝろのやむことをえす。やかてかいつけてかへしつかはし

つ。

六樹園

□右序文は架蔵本によつた。本書は初編(上下)、後編(上下)、三編(上下)の六冊で、江戸日本橋通一丁目大坂屋茂吉より刊行された。凡例によると、本書は「狂歌作者列伝」とすべきところ、書肆がいうには、この書名では平凡で売れ行きが悪いだろうし、ここに取り上げた人物は皆奇行の持主なので「奇人」の字を冠せたほうがよいというので、標記の書名にしたことである。

内容は当代の狂歌師たちの挿話をとりあげたもので、雅望親子も収められている。作者であり挿画を描いた八島定岡は、しばしば狂歌本の挿画を担当している。定岡は本姓平井氏。のち八島八斧吉といった。画名を春信、狂名を堀川太郎といい、別に神歌堂、岳亭、岳山、五岳、梁左とも号した。画を北溪、狂歌を雅望に学んだ。初め江戸坂本町に住居したが、天保年間に大坂、京に移り、読本狂歌本などを多数著わした多才な人物であった。特に有名なものには、川柳漫画ともいふべき『画本柳梅』がある。なお定岡については『川柳絵本柳梅』(岡田甫著、昭和四十四年、芳賀書店)解説が詳しい。

ここで奇人譚に収められている人たを煩雑であるが記しておく。鬼外楼内成・岸廼屋男根・大川亭厚丸・祭遊亭清喜・祭永亭持丸・文々舎蟹子丸・六樹園飯盛・青峨園真砂子・浅桐庵一村・新泉園鷺丸・三寸亭草美・塵外楼清澄・五柳園一人・倭和多守・水晶庵染主・形上是粘・壺椿楼哥種(以上初編)、橘五園香久美・曲亭馬琴・花亭栖真芳・浅紫庵仲住・千柳亭唐丸・万宝亭喜梅・酒廼屋吾安・緑樹園元有・春秋庵永女・浅頼庵千本・頼風園千直・壺月堂市住・金母楼種義・茅一園義澄(以上二編)、三筆楼胤成・十返舎一九・六時園多利雄・松風舎茶廊・真琴楼根松・世間亭吉住・要義園近住・和調亭永永・唐樹園南陀羅・五明楼鳩照・一秋亭落霞・串珠園光音・文景舎汐道・春

廻屋不美人・山外楼金成・夢中楼拔之・百種園有武（以上三編）。

※八月十七日、清水浜臣没す。享年四十九歳。

○十一月、普米齋玉粒の剃髪に際し、狂歌を贈るという。

▲戯作者小伝による。

□右書に「姓藍庭、名林信、号を藍亭、又米齋とも云り、備書を業とす、馬喰町四丁目に住し、後大伝馬町新道に移る、文政七申年十一月剃髪す、其節、六樹園より狂歌を贈らる、同八酉年、芝全交が親族より名を乞受て、二世司馬全交と改名す、同十亥年五月二日没す、男あり、前豊国門人にて国景と云ふ」とある。『国書総目録』によると十九種の著作がある。

玉粒に贈ったといわれる狂歌は未見。

○『水魚大会狂歌合』を芍薬亭長根と撰して刊行する。

▲本年三月十九日の項参照。

□本書は水魚連長の蔵版で、世話役は柳橋万八楼の主人吹自在得有（別号柳花園）である。当日の兼題は「冬の歌」「恋の歌」であった。

○『列僊列女画像集』（大二冊・北溪、定岡画）を鹿都部真顔を撰して刊行する。また跋文を記す。

#### ▲跋文

鷺丸といふ色のしろい男三五記の鷺の本末をよみ見て深山がらすもしら鷺も歌をよまではあるべからずと終に振々たる連中に交はり。へら鷺のへらをつかはす青鷺のうまいところを取りて梅の芳兵衛のかたみがはりに二巻の草子をぞつくりたる。げに白羽のしろき白雪の曲にことならず。この鷺流の狂言には鷺娘も帽子をぬぐべく鷺森稻荷もげきやうあるべく五位鷺も首をちぐむべし。いでやゆるぎの森の鷺すらもすきの道にはめの見えぬ安針町の縁の下丸太につれだいい鷺坂伴内ちやり人形のかま髭の筆に泥鰌をふませてしるす。

文政七申年

□文化十四年十一月に南畝の仲介によって、雅望は真顔と一応和解をしたのだが、仲が完全に戻ったというわけではなかった。しかし、本書のように真顔と共撰の撰集があるのを見ると、ある程度元に戻った感がある。

本書は新泉園の蔵版である。新泉園は五位鷺丸のことで、通称紀平庄之助、名を義雄という。江戸新シ橋に住居した五側の判者である。文政十年二月没、享年不詳。

○『狂歌五老峯』（岳亭画）を撰して刊行する。また同書に狂歌を収録する。

#### ▲土産蛭

さは姫の涙の雨になはしろのみかさますなる神田ほくひ田

#### 料理屋鰻

うらしまか七日はかりも釣置て鰻をつくるゐなか料理や

#### 船中夏月

苦かりておけハこそ何れ葛西人匂ひや袖に月の夜の舟

□雅望の別号「五老」の名を付した五側の狂歌撰集である。

○『艸春興帖』（一冊）を撰して刊行する。

#### ▲『国書総目録』による。

○『狂歌花鳥風月集』（半一冊）を共撰して刊行する。および序文を記す。狂歌一首入集。

▲壺月堂のあるじ風月のさえめてたきあまり常に花鳥のいろねにあくかれつゝ、都ひなをいはすうかれありきてこゝろやらさる時もなし。さるこゝろよりおもひおこして、よつの時の花鳥風月を題となして、人々のよみうたをあつめて、なにかしくれかしに取あへさせつ。このひとまき、しちに此あるしのうるハしく、あかきこゝろもちひより、とみにかうさまの冊子などハなりぬ。これまたく月日のさへのたくましきに、はけまされて、たはやすくかゝるくはたてのことなりた

り。いてや花鳥のいろねをめてものすることは、此あるしにあれやしにけん。おなしころにうかれ興して、おもほへすはしつかたにたみたることはをさへつりちらしつ。

六樹園主人

▲扉に、

六樹園大人 兼題 花

浅草庵大人

臥龍園大人

千種庵大人

鈍々亭大人

八木亭大人

芍薬亭大人

浅月堂大人

とある。

▲刊記に、

輯者 壺月堂市住

画像 葛飾為一

中画 龍斎北泉

浄書 北栄子捨魚

雕工 玉光舎占正

文政七年申九月刻成

とある。

▲雅望の狂歌は「花之部」に、

唐人も王と称せん室町の御所桜とて花もよし満

□本書を「文化十一年」版の再摺本としたが（「年譜稿（七）」および

「未定稿・石川雅望著述目録ノート」・『近世文芸稿』25、広島近世文芸研究

会刊、昭和五十四年十一月）、扉、刊記、内容等から推して、全く別の

ものである。したがって「文化十一年」の再版とした記事を削除する。なお文化十一年刊『花鳥風月集』はいまだ未見である。

本書は葛飾北斎描く、三十六人の狂歌師の肖像が異彩を放っている。三十六人というのは「三十六歌仙」に倣っているであろう。北斎は文政三年より「為一」と号したが、本書の肖像を描いたのは、五十六歳の時で、例の『北斎漫画』を出し、漫画に集中し、自己の画法の整理をはかって、一つの新生を期するときであった。本書は「壺側」の狂歌撰集で、選者は雅望の他、扉に記しているように「臥龍園梅麿」「千種庵諸持」「鈍々亭和樽」「八木亭満守」「芍薬亭長根」「浅月堂春人」らがなっている。

文政八年乙酉（一八二五） 七十三歳

○一月六日、孫升誕生。

▲文政八年乙酉正月六日亥刻升誕生（中村幸彦先生蔵「六樹園自筆忌歴」）。

○一月十日、四世藤間勘左衛門の追悼歌を詠む。

▲文政八年むつき十日四世藤間勘左衛門のみまかりしと聞て

三味せんの糸によるものならなくに心はそしや別れ三重

（「六樹園狂歌集」）

□藤間勘左衛門は何人か不詳である（巻末参照）。

○春、『狂歌大黒柱』（二冊）を編纂し刊行する。また序文を記す。

▲春かすみのいとをかしくふつくえにひちたてゝうみやりたるにそらみつ大和舎ぬし来ていかてこのされうたえりてよといふかまに歌よみもて行にたて置たる柳さくらにはひにほひみとりにみとりしことは花はいつれをいつれとわきてをらなむされといなりむもすいならぬはわかつかにつましなしをつけ置たるをその桜木に彫にのほしてかくひとつの文とはなりぬ

▲刊記

六樹園

文政八年乙酉

四日市 上総屋 利兵衛

麴町 角丸屋 甚助

両国吉川町 山田 佐助

▲扉

六樹園大人撰

東都

衆星閣 梓

文会堂

○十月、勝川春英七周忌の碑文を撰する。

▲勝川春英翁略伝 久徳斎勝川春英翁は大江戸和泉町の人なり。世々聞へたる絵師なることは人の知る所なりければいわず。父は磯田次郎兵衛といひ。母は某氏とか。はやう勝川春章子が弟子となりてそれが氏を継ぎぬ。子二人あり。女子は先だちてうせぬ。男は斧二今に世にあり。翁明和五年戊子に生れて文政二年己卯十月廿六日年五十八にて身まかりぬ。浅草本願寺なる善照寺に墓あり。翁本性すなをにて飾ることを忌み嫌ひていつこへ行くにもけさの服のままに出でぬ。かくてはみぐるし。かさねてはうるはしき衣きて来り玉へとあそびがいふを聞きて後の日又かしこに至りぬ。出あへるものぞ打ちたふれて笑ふことかぎりなし。翁猿楽の装束ことにきらくしきを打ち著てまめたちをりてみづからは可笑しと思はぬげにてぞ有りける。ある時ころを過して家に帰り来て戸のかたに立ちゐていかに春英のやどりは是れかと高かやかに言ふを妻驚きて戸引きあけて入れつ。何とて今のほどきはくしくはのたまひそと言へば日を経て帰り来ればもし此家あだし人の物になりぬらん。さては案内せでは悪しからんと思ひてさは云ひたるなりと。すべて翁のしわざ願長康の風ありと皆人は言ひけり。おほかた江戸絵と唱へて木にゑりて刷りたるものは翁の右に出づるも

のなしとぞ北尾何某は言ひけり。翁なくなりて七とせにはなりぬとてまなびを受けたる人々かたらひ合せてかくさまの石を立てゝおのれをして聊かなる伝へことをしるさせつ。あわれかゝる人のむそじにも足らで終りをとりぬる。かへすくおしみてもおしむべきことなりかし。

文政年乙酉十月

石川雅望翁六樹園書

の浮世絵師、第一書房、昭和五年による)

(「赤沼掃墓叢書」六および山名格蔵著「日本

□雅望撰文の春英記念碑は、向島長命寺境内に建立され、現在も同所に存在する。春英(宝暦十二文政二)は、勝川春章門下の逸材で、役者絵を得意とした画家である。本姓磯田久次郎。号を久徳斎という。勝川風の細判、役者絵が多く、ほかに大錦判の役者絵「おし絵形」の列作は出色の作とされている(「浮世絵画人伝」および「日本の浮世絵師」)。

○冬、『狂歌吉原形四季細見』(半一冊・岳亭定岡画)を鈍々亭・浅草庵・芍薬亭・宝船庵らと撰して刊行する。

□編者は霞仙亭桃人、催主花笠連、板下駿台狂夫、彫刀玉光舎占正、序文芍薬亭長根(文政七年)で刊行された。刊記に「文政八乙酉冬刻成 花笠連蔵版」とある。

なお選者の一人浅草庵は、二代目浅草庵守舎(初号浅草庵。通称大垣新兵衛。もと上野大間々に住居、のち浅草へ移る。初代浅草庵の門人。天保元年四月四日没。享年五十四歳)で、『狂歌花鳥風月集』に跋文を記している。

○『狂歌七変化』(半一冊・陳芬館画)を瓢箪園・昇平亭・桜曙園・六義園・仙禽舎・六極園らと撰して刊行する。また狂歌一首入集。

▲歌人

たけたかしさまはおとらし富士の根にならふ山辺の赤人か歌



□会主は翌樹園好友。書名は「傾城・大津絵・鹿島踊・大原女・七福神・座頭・歌人」の七題を七人が評したところから名づけられたのであろう。なお東京大学図書館蔵本は森鷗外旧蔵本である。

○『今様職人尽歌合』（半二冊・鍬形蕨齋画）を鹿都部真顔と判して刊行する。また序文を記す。

▲上巻 撰者 鎮廻屋大門 判者 俳諧歌場真顔

下巻 撰者 五柳園一人 判者 六樹園飯盛

序文 飯盛 跋文 真顔

題 月・恋・花・述懐

文政八季己酉七月中浣発兌

新泉園蔵版

### ▲序文

職人つくしのけやけきものは三十六番と七十一番となり。此ほかにかたにつくりものせるはかぞへもつくさべからず。蕨齋あるじこれらにあげざるちかきの職人どもをえりひろひてかたのごとくうつし置けるを世あたらしき事におもひて神泉苑鷺丸といふ男人々の詠歌をこひてこれを鉄廻屋ぬし五柳園ぬしの判をもとめてまさりおとりを定めさせつ。いでや此判のしぎまことわりあきらかにしあればたれもく口いるべくもあらず。さて木にありてとちぶみとなししは鷺丸ぬしのしわざなりける。此判者たちはなりはひの道にいそがしければ鉄廻屋ぬしの判の詞は歌垣のせうとにあつらへ五柳園主のはおのれにゆづりつけつれば筆のゆくまゝにおうなくあやしき詞どもをならべつ。此事つぶくとかいつけてよと鷺丸主がいふままに例の鳥の跡をばとりいでつ。

□本書は『列僊列女画像集』（文政七年）と同じメンバーである。

○遠藤春足著の雅文笑話本『白痴物語』（二巻二冊）の序文を記す。

▲此のしれものゝ物語は、阿波国なる遠藤春足ぬし、わらハとものこ

へるまゝに、かきてあたへたるものとなん。さるハいミしきすき人にて、もろこしとなく、やまとなく、なにくれの書とも、のこるまなくとりあつめ、みわたし給ひつるうへ、本性のさとくかしこくおはすれば、さえのほと、すかゝとのほりゆきて、はやう世にたくひなき、はかせたつ人とハなり給ひぬ。おのれ、ちさとをへたてゝすまひぬれと、此ぬしのミやひこゝろのことなるを、ふかくしたふまに、かたみに文とりかはしつゝ、うるはしうむつひかハしつ。一日かゝる書おくりおこせてけるを、まきかへしよみ見るに、けに此比の人の筆つかひにも似ず、あてにおかしく、見ところありて、またたくひあらしはやとおほえつ。さてなん、たゝにすくしかたくて、このはしつかたをかひよこすも、やさしき人のかたへにハ、はちかゝやかしきこゝちのするや

六樹園のあるし

石川雅望

□本書は、雅望の『しみのすみか物語』に倣った雅文笑話集である。挿絵も『しみのすみか物語』と同系の筆致で描かれている。内容は既成笑話に材を得たものと新作が半々で、とくに艶色咄と春足の郷里阿波に因んだものが多い。なお本書は『咄本大系』第十九巻（武藤禎夫編・東京堂出版・昭和五十四年十二月刊）に翻刻紹介されている。

文政九年丙戌（一八二六） 七十四歳

※正月、伴信友が『雅言集覽』を書写する。

▲宮内庁書陵部蔵本の奥書に、

右雅言集覽自與至寸部四十五卷以作者草案転写本、課諸ノ人書寫了、宛採用本書誤写不少、他力訂正可増補 文政九年丙戌正月 伴信友

とある。

□書陵部の小池一行氏を煩わせてご調査いただいた。同氏によると書

陵部刊『和漢圖書分類目録』記載の「雅言集覧 石川雅望 嘉永二年版  
(伴信友) 三冊」とある一本が該書とのことである。同書は次のよう  
な取り合わせ本である。即ち、

いへ部 初篇 三冊 文政九年九月発行  
ちへ部 二篇 三冊 同右

よへ部 三篇 三冊 嘉永二年七月発行

※以上九冊「青藜閣(須原屋伊八)」蔵板。

らへ部 袋綴二十二冊 書写本

となっており、書写本の最終冊に伴信友の前掲筆がある。

○一月十五日、柳橋大のし楼で狂歌よみそめ会を開く。

▲文政九年丙戌年正月十五日六樹園のよみそめ例の兼題柳にて柳橋大  
のし楼にて発会あることかねてしらせ給ひたれば雪ふりの空にゆき  
たる詞

むつきのもちの日つとめて戸をおしひらきみればあさばけ有明の月  
とみるまでに雪はふりつみたり。今もちりつゝ松と竹とのけじめみへ  
つるとははやう紫の詞なり。香炉峰の雪は清女の御簾に高く巻て富士  
の雪は初夢の一にて白粥に似たりとは当野のほまれありとか。けさは  
小豆粥なれば砂糖とつれゝに雪中宮の御まへの山ほどとたはれつ。  
これを明りにふみをよみしひつてん。はれつゝありけん。此日のつか  
ひに雪をかゝざるといふ。そのぬかりたる道に雪のふりにしふるをよ  
り給ふよみそめの兼題を柳にながすもあめれどこゝは一番管仲が駒  
よりやせたれども此膝栗毛つたなしとも此すり物ひつさげつゝ遼東の  
冢の頭曰く狩人頭巾に手拭をまへよりうしろへ頬かふり窓の目のふく  
めんは口封してさむく鷺毛とも梅の花とも見わたしていざさらばとは  
去年の顔みせのせりふもおもはれて雪片は半疊なしになにはの芝居の  
如く二条の院の雪まろげのあこめ姿のめだきは光源氏にみへて常盤  
の前の児を具したる伏見の里さへ思ひあはせられ雪中に竹の子笠のわ

らへは孝行酒やの御用にて茶やのまへの氷の上にはらばひて魚を得し  
は雪の姥に孝なるべし。其楼のけん酒のリヤンゴウサイのおよびこそ  
鳥の跡下駄のあとにも似たりけん。あるは河豚汁湯豆腐にてたのしむ  
もあれど大根おろしの道の空興さめたりといはせて仏作るもみわたし  
つゝすたゝゆきて須田町やさのゝわたりの雪ならで袖打はらふ八辻  
が軒一夜のやどりをとりふえにて傘の蛇の目をしばたゝき下駄の歯の  
ねとともにふるひつゝ入れば此家の少女は白妙の雪女にやとけはひい  
ででいその時の火鉢には梅松かねし桜炭粟めしいろのせん茶にあた  
たまりて立いづれば土手柳は干鱗が白鰯鯰ふむごとたどりつゝ柳橋ま  
でちかづきけり。されば一首と思ふほと思ひもかけぬうしろより打か  
かるをかきにながして

かゆ杖のやうにふぶきの打かゝる柳の枝に尻をうたせじ

とすさみける。又まへよりは綿ばうし雪を打つくるやうにふりけるを  
めではやす雪はみるまに□<sup>有し</sup>せかねの銀世界とぞみするくせものあとし  
ら雪と大のしに越路のしるしの竿ならでみじかき筆にのたくらせてか  
くあしびきのながゝしくもつけさせんことを雪に思ひて申になん  
(『永久田家務本伝』巻六)。

□少しく煩雑であったが、門人山田早苗の「よみそめ会」の戯文を掲  
げた。「詠み初め」の模様を記録した資料は少ないが、幸い早苗が残  
してくれたので興味深い。雅望に限らず、他の宗匠も同じように、一  
月に「よみそめ会」を催し、なにがしかの「よみそめ代」を徴収した  
のであろう。

○一月、二世瀬川如皐編『牟芸古雅志』に序文を記す。

▲狂言堂のあるじ狂言物するいとまことに、狂言ならぬまめことをは  
のへつ。翁本姓うるはしく、ふるきをしのぶこゝろ深ければ、かうや  
うのふるはうごなども、しねんにふくらによりあつまれるなるべし。  
かの李笠翁といへりし人は、書ともあまたあらはしゝ中に、十種曲と

いふものありき。さらば此如皐の翁のかれをしもまねひとりて、世にあらんほど狂言堂にはこもりぬるにやとおもへば、そゝろにゆかしさたちそひて、かかる著述をよみ見るにもおろかなならざるこゝちぞする。

#### 六 樹 園

□本書は一名『写勝入禁解』という演劇関係の隨筆である。二世瀬川如皐は名を定相といい、はじめは河竹文次、御園文次と称した。狂言堂、文車、御溝園と号した。宝暦七年江戸に生まれ、初代河竹新七について、河竹文七として番付に載った。天明四年以後、俳優から作者に転向、初代如皐につき、初代没後享和元年十一月中村座で二世如皐を襲名した。江戸では四世鶴屋南北につぐ作者として、文政末まで健筆をふるった。天保四年十一月四日七十七歳で没した。

○六月、『蓮華台 徳成父追善』（一冊・北溪、北斎、国貞画）に序文、追悼歌をよせる。

#### ▲序文

徳成ぬしの父なる人うせ給ひてよりよつのときなゝかへりにぞなりにたる。げにとしつきのながれはやくこといまさらにおどろかれて、そゝろになみだのみいでくあり。いますかりしときことに絵をこのみて、なにくれの本とりあつめて手はなたすもてならひたまひければ、さる人の供養にはすぎ給うけるものをこそとりいとむべけれど、ここかしこよりおくりおこせたる絵とをもひとつらにつらねて、さてしたくうせる友だちのことのはしもかいならべて、かうさまのふみはつくりいで給ひつ。あはれけうのこゝろたかくものし給ひけるかなとおもふには、いよ／＼ほしあへぬにてぞくちぬつうにおはゆるや。

文政九年六月

石 川 雅 望

#### ▲追悼文

山田徳右衛門の名を万屋とよべり。本性まめやかにすなほにして、を

ごる心なく人をあはれむこと大かたならず。しちに寛仁の長者なりとあふかざるものなし。文政三年庚辰六月二日やまひなくて身まかりぬ。としは五十五にぞなりける。あはれ君ちとせのなきぞかなしきとうちうめかれて、ここにかひなき筆をとるになん。

#### 六 樹 園

#### ▲追悼歌

万徳成が父みまかりしを悼みて

富士の雪と消えにし人を水無月の其夜よりふる我涙かな

□徳成は通称山田徳蔵といい、江戸四ツ谷に住居した五側の狂歌師である。雅望は徳成の父親の追善のために努力し、馬琴、真顔らの文化人が追悼歌をよせ、北溪、北斎、国貞といったこれまた一流の画家が挿画を描いている。

雅望が馬琴に追善歌を依頼したことを、馬琴は、

文政九年正月廿九日 昼後、尾州旅人狂歌師田鶴丸来訪。予対面。

旧冬六樹園より所望の四谷万徳成父七年忌追善の歌、六樹園へ届可申よし、被申に付、染筆たのみ遣す雑談後帰去。（『馬琴日記』第一

巻）

と記録している。

○六月、『狂江戸砂子集』（続編・半二冊）を芍薬亭長根と撰して刊行する。また狂歌入集。

#### ▲八幡社

#### 六 樹 園

わすれ草たはこ入からとり出す江戸のつくたの住吉のきしおくり来ししんせつ忘れおかすなるまめと涙をこほす大森

中野

妙法寺鉦をたたかぬ宗旨とて馬も太鼓をうつ四谷道

螢沢

おもふことよこしまなしといふ詩をは三百できく駒こみの僧

禿屋敷

三つならふ橋さへあるを二筋のけころはしたるたへし山下

馬の鞍横町

ゆひかひの大門とほりそのかみの文にちらしくかなものやみせ

中川

すみた川わたし場ちかくつはなうる子ともはめしてこへませといふ

▲刊記

文政九丙戌年六月梓行

東都書林

神田鍛冶町 北島順四郎

馬喰町式丁目 西村屋与八

□序文は西來居未仏が記している。本書は文化八年刊(同年の項参照)の続編である。なお雅望の「すみた川わたし場ちかく」の歌は、文化八年刊に「隈田川」の題で入集している(同年の項参照)。

○六月二十四日、『雅言集覽』について角丸屋甚助、大坂屋茂吉に書簡を出す。

▲酷暑之節御多福被成御座奉寿候然者集覽之本之儀付而国山田屋御主人□□趣仕立本一篇ニ付五十部つゝ故障にあたい差出し候ハバ多分対談も可整様達而相動候ニ付餘り過分と存し得□社中夫々へも申すゝめ候而右五十部可差出旨ニ而きはめ返答致候処又候今度之御返事ニ為□題候山田屋主人返答と申格別相違致候段何□不心得ノ事ニ御座候且又其節之返答ニ五ヶ年ヶ間見のかし候を必竟隠値と申物かさし□申私事数之間売捌候売値を差出し候而初篇二篇尤板木代金貳十兩ニ売渡し并ニ未刻之草稿も添渡し申候而返答之旨社中へも申聞候処餘り御挨拶前後不合之事此方面をならす夫々之衆中へも相承り居候事勤弁もなく売値□□御事何も拙き申言も存し候隠値之分別もあやしき事に存じ候五十部之訳立も相止又々外ニ分別も有之由申候得□□□差留参候間一旦は申出候事故訳立五十部差出し可申但板木譲り渡候之儀熟談致しか

ね候右之仁かたに和歌八重垣之株有之由是ハ歌読みならい之初心之為ニ作り候物にて候我等著作さまとは違ひ候て和文章書ニ有之詞を誤まらざる為ニ年来心かけ取集候事にて和歌之為ニ致書ニハ無之候□よいいくつも重なりを不厭類語□を引出シ畢竟社中之者共も□はし書日記など不調法なき為之心かけニいたし候書にて候故貧窮之者へも其儘遣候事も候得ば売値などと申事ハ無之事にて候殊ニ和歌と文とは同語ニても心の替り候事響はうるはしきと申詞歌ニては艶なる詞ニ可申得共文ニてはきつとしたる事りつはなと申事ニ違ひ候得は歌と文とは相違いたし且文ニは爲□を□ニわけ候事なれと和歌ニハ其差別なく候是等を御考可成候文章之筋和歌の本之本障リニはならざる事□焉ニてもずべて一部を能読被申候ハゞ引出し候物語類詞共ニても和歌ニもたれ候事此無之候然を強而八重かきの妨げと被申候ハ古本□御取扱の書林かたの御了簡とも不覚候是分之事申出し候は事なく相成候へは委は不申出候何分暑之砌にて老来むつかしき事は聞もうるさく存候間草々申上候宜御勘考可被下候以上

戊六月廿四日

五老

角甚様

大茂様

(五老先生書面写「慶元堂書記」収)

□雅望生涯の大作『雅言集覽』刊行の経緯については、拙稿「石川雅望『雅言集覽』の出版経緯について」(『語文』四十四輯・昭和五十二年十二月)において論じたが、紙数の関係で省いた資料があった。右に掲げたものもその一つである。

『集覽』出版についてここで詳しくはふれないが、一言でいえば、ごたついた原因は『集覽』が有賀長伯の『和歌八重垣』と類似しているということであった。すなわち当時の出版界のタブーであった「類版」に『集覽』が抵触するということであった。これに新興書肆(角丸

屋甚助」と旧来の書肆（須原屋伊八等）との葛藤がからんでいた。

この係争によって、『集覧』は書肆より刊行されず、雅望の私家版（自費出版）という、雅望にとっては不本意な形で世に出たのである。そして今年やと九年ぶりに書肆より刊行されることになったのである。雅望の書簡は『和歌八重垣』と類版でないことを縷縷釈明しており、学者としての意気込みがひしひしと伝わってくるようである。と同時に老齡の身にとつて、書肆間の係争は、雅望にとつては迷惑なことで、「老來むつかしき事は聞もうるさく存候」の文言にその氣持がよく表明されている。

雅望のこの書簡の前に、角丸屋甚助が書林仲間の月行事あてに差出した「書付」がある。これもまた前記拙稿に省いたもので、ここで紹介しておきたい。

#### 乍憚以書附申上候

##### 一雅言集覽

初篇三冊  
式篇三冊

右之書此度須原屋伊八殿を売留之儀被願出候ニ付右願書寫し為御見被下忝被見仕候依而左ニ始末申上候右書者去ル文化十四年六月中寫本留改相濟候ニ付其後同十四年十二月彫刻出来割印相願候処伊八殿を和歌八重垣ニ差構候趣故障被申候ニ付早速藏板主江其段申聞候処先年寫本改願濟之所今更故障可有筈無之此度板行出来候而彼是被申候義何共難心得儀与被申聞殊之外立服被致候ニ付懸合相整兼其儘ニ成行居候右ニ付私儀藏板主与不和ニ相成久々出入不仕候其内式篇目彫刻被致候然処一昨年世話人有之再び出入致候様挨拶致吳候ニ付藏板主方へ參り故障之筋は致訳立熟談仕割印改添章取之候様相動候江其其砌は返事不取□候ニ付折々申談候処漸去ル西夏中同人納得之趣返答有之候尤八重垣目録之ニ似寄候故山田屋佐介殿如願伊八殿方へ致訳立熟談仕度段申入候江其其砌は伊八殿病中にて懸合行届兼自然ト延引ニ相成此節猶又被相懸合候処伊八殿被申候は彫刻之致度旨佐介殿江挨拶被致候江其板木

之儀 無廻御方々へ出銀被致候義故何共難相斗候間為訳立出来本志篇

ニ付五十部つゝ相渡可申候間納得致吳候様種々申入候処前書申立候通りニ無之候而は株式ニ障り候様達被申立熟談整兼候ニ付佐介殿を双方迄取扱相断被申候江其伊八殿被申立候趣意相定山田佐介殿取扱被致候通卷篇ニ付五十部宛ニテ納得被致対談行届候様御取斗被下度御繁用之御中何共乍御苦勞偏ニ奉願上候以上

文政九丙戌六月

角丸屋 甚介

#### 三組

御行事衆中様

（「慶元書記」収）

これは須原屋伊八の異議申立てに對しての角丸屋甚助の弁明書である（須原屋の「書上」は前記拙稿に全文紹介）。そして角丸屋は、三組（江戸における書物仲間で、「通町組」「中通組」「南組」をいう）行事に調停を要請している。

○九月、書肆須原屋伊八より、『雅言集覽』刊行に關して書簡。

#### ▲以書狀申上候

御作雅言集覽角丸屋甚助にて売弘被仰付候処和歌八重垣株私所持仕候ニ付株筋申上候所御聞濟羅下依之初編二編三編迄御藏板ニ付甚助私而人限売弘支配羅仰付四編より大尾迄御草稿ニ而御讀羅下株筋相立難有奉存知候然其上四編より御草稿御渡し次第早速取懸り無延引相統彫刻可仕候毎編出来之節為御謝礼初摺本廿五部つゝ進上可仕候為念如此恐惶 以上

文政九丙戌九月

（「須原屋伊八方より參り候書付の写」）

『永久田家務本伝』卷十二に所収

□大手書肆須原屋の面目躍如たるものが感ぜられる書状である。そして戯作類と違つて、このような地味な學術書の刊行が、いかに冷遇さ

れていたかを物語っている。

○九月、『雅言集覧』六冊刊行される。

▲家蔵本の刊記に、

文政九年丙戌九月発行

江戸日本橋南老町目

同両国吉川町

同神田鍛冶町二丁目

同神田四丁目

同芝神明前

同浅草茅町二丁目

とある。

□序文は本居大平、源興詩、賀茂季鷹、遠藤春足、源剛らが叙している。刊行されたのは「い」「か」部六冊であった。紆余曲折を経て、やっと陽の目をみたのである。

○『雅言集覧』の上梓を賀して、山田早苗より詩を贈られる。

▲文政九年の大小の月を詩作して賀『雅望翁』

橘樹園早苗作

興<sup>ニ</sup>四谷庵<sup>ニ</sup>鳴<sup>ニ</sup>国中<sup>ニ</sup>

八霜<sup>ニ</sup>雖<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>壯年<sup>ニ</sup>色

さるは雅言集覧の上梓を賞したる也。

四・三・八・霜・正・六は其年の大の月也。（『永久田家務本伝』

巻六）

□他に多くの人たちから、賀歌、賀文などが寄せられたであろうことは、想像に難くはないが、管見によれば早苗の賀詩しか見当たらない。

○『狂歌の集』（一卷・北溪、文晁画）を撰して刊行する。

▲国書総目録による。未見。

○『月並堀川後度狂歌集初会』（勸進五総連）の行司をとめる。

○『丙戌月並堀川後度狂歌集』を撰して刊行する。

○『三回稽留（奉納額面）会歌合相撲立』を真顔、准南堂、鈍々亭、秋長堂らと撰して刊行する。

▲右三点は丸山一彦氏「狂歌合にみる地方と中央の交流―文政期の資料を通して―」（『文学』昭和五十三年八月号）による。

〔補遺〕

天明七年の頃

○この頃か、南歌撰の詩文集『東風詩草』に詩を収載される。

▲両国橋 石 雅

夾岸人家百尺楼 雲霞忽散大江流

彩虹始見長橋影 能使春光滿二州

□右書は「天明戊申孟春」の南歌の序を持つ詩文集で、香山・衡岳・菫堂・乗弊ら三十二名が、江戸名勝地を題材に詩文を作っている。雅望の漢詩との関わり合いは、天明四年の『十才子名月詩集』からである。

○この頃か、「石川雅」の号を使用するか。

▲『東風詩草』に「石雅」とある。

□「石雅」の号使用を「寛政元年より」と記したが、鈴木俊幸氏より南歌の『東風詩草』に「石雅」の号で詩一篇が収載されているとのご教示を頂いた。

該書は天明八年に成立している。葛屋重三郎より刊行予定であったが未刊に終わり、写本として伝わっている（天明七年刊『狂歌才蔵集』の巻末広告に発刊広告がある）。広告から推すると、本書は天明七年ごろから編纂が行われていたのである。したがって「石雅」の号は、少し遡って「天明七ごろ」から使用かとした（天明四年刊の『十才子名月詩集』には、まだ「宿屋飯盛」とある）。

文化八年の項

○『狂歌画像作者部類』の雅望序。

▲作者部類は建武康安のころつゝり／おきたるをちかき正保の時にいたりて増補せる物となんこゝに玉光舎占正といふ者さるふりにし路にならひて／狂歌作者部類といふ書つくり出つ／名字をのみかいつけむはさう／しく／興なしとてかたへに其姿をまかゝせ／よみ歌をさへものしつ歌ともハおのれか／ひかこゝろのまに／とりえらひてかい／ならへみつるにいとけさに数あまた／あれはこと／／く絵をそへむハあまりに／わつらはしけれハなかははしふきて／かしらかきの中にくはへつさて木に／えりてのちもし誤もそあると今／ひとたひよみわたして見つるに／巻のはたにおのれか例のたみこと／をさへしるしつけてかたちをさへ／ゑかきたりいかかはうもれいたき身の／人なみなみなる惣盛これかいやりて／よといへとすくに木にえりぬるうへハ／せんすへなしとこころこはくゆるさ／たれはさてやみぬるさるハかゝやかしう／人わらへるわさにしあれハ汗／あゆるこゝちそするや此ふみすへて／占正かひとつこゝろにこゝかしと思ひたつ／ねて姓名すみ所なともめ出て／注しつたることゝなむ猶もれたる／もすくなくからしそはすき／／にこそ／いとなみ物すへけれとかれかいふまゝを／筆にうつしてあまねくきんたち／にきこゆるになむ

六 樹 園

〔未完〕

本稿を成すに当たって国立国会図書館、東北大学図書館、慶応義塾大学図書館、神宮文庫、日本大学総合図書館、成田山史料館、浅岡修一氏、井草利夫氏、青梅市郷土博物館々長稲葉松三郎氏、小池一行氏、鈴木重三氏、鈴木俊幸氏、田中善信氏、永井啓夫氏、中村幸彦先生、永昌寺、正覚寺などの方々にお世話になった。記して感謝する次第である。

〔付記〕

四世藤間勘左衛門（二三頁）について

井草利夫氏のご教示によると、森田座専属の「三絃引き」で、祖は武州入間郡川越領藤間村の生まれであり、もとは能の狂言師であったのが、江戸に出て踊の師匠の後、劇場振付師になったという。

（昭和五十五年八月四日 受理）

（昭和五十五年十二月二十日 発行）

